比企谷八幡と船見結衣の会話

風吹18号

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡と船見結衣が生産性のない会話をする、ただそれだけのお話。

目次

⑫ 45
⑪ 41
⑩ 37
⑨ 34
⑧ 30
⑦ 26
⑥ 22
⑤ 16
④ 12
③ 8
② 4
① 1

☒ 94
☒ 91
☒ 87
☒ 84
☒ 80
⑳ 76
⑲ 72
⑱ 68
⑰ 64
⑯ 60
⑮ 57
⑭ 53
⑬ 49

143 139 135 130 126 122 118 114 111 108 105 101 98

151 147

①

「――やあ、比企谷(ひきがや)くん。ひさしぶりだね」
「――おう。すまんな待たせて」
「大丈夫だよ。私も五分くらい前にに来たばかりだから」
「そうか、良かった。……それにしてもひさびさだな。一ヶ月ぶりくらいか？」
「ほんとだ。よく考えたらそうだね……あまり頻繁に会いすぎるのもお互い大変だろうし、これくらいの頻度がちょうど良いかもしれないね」
「だな。どっちもそこまで口達者じゃないし、毎日会うようじゃ、話すこともなくなるだろうしな」
「ふふっ。たしかに」
「しかし、会うときはいつもここだが、船見(ふなみ)は良いのか？学校からはちょっと遠くないか？」
「良いの良いの。ここのカフェ、気に入ってるから。お客さんも少ないし、なによりほかの席との間隔が広い。――わたし、他人に自分の話を聞かれるのがあまりすきじゃないから」

「……そか。なら良いんだ。――それじゃなにか頼むとするか。もう頼むもん決めてあるか？」
「うんっ。わたしはブレンドコーヒーとモンブラン」
「モンブランか、良いな。俺もそれにしよう――すみません。ブレンドとモンブランを二つずつ、お願いします」

＊　＊　＊

「――さて、なにから話そうか」
「ふふっ。会うたびに開口一番それ言うよね」
「く、口下手だからコミュニケーションのはじめかたが得意じゃないんだ、許してくれ」
「わかるわかる。わたしも会話の口火の切りかたがぜんぜんわからないんだよね。いっつも困っちゃう」
「まあ、互いにおしゃべりとは正反対だからな。――とにもかくにもだ。その、最近はどうだ？……学校とか、ごらく部とやらとかは」
「比企谷くん、なんだかお父さんみたいだね。――学校はいつもどおりかなぁ。勉強はもとから嫌いじゃないし、運動も苦手ではないからね」
「陸上部に勧誘されるだけの運動神経をもってして、運動は苦手ではないと」
「か、からかわないでよ。まあ、運動は得意な分野もあるにはあるけど、オールラウン

ダーってわけでもないから」
「からかったつもりはなかったんだがな……なるほどなぁ。それで、ごらく部とやらは？」
「うんっ、とってもたのしいよ。わたしにはもったいないくらいにはね。みんな良いこだし、あっちから話しかけてくれるから、寡黙な自分にとってはうれしいね」
「ふむ……じゃあ、この一ヶ月、元気にやってたわけだ」
「ふふふっ。ほんと、単身赴任先から帰ってきたお父さんみたいだよ」
「からかうなからかうな……まあ、たしかに自分でもお父さんみたいな尋ねかただったとは思うけどな……」
「――それで、比企谷くんは？」
「ん？」
「比企谷くんはこの一ヶ月、どうだったの？学校とか、奉仕部とやらとか」
「そうだなぁ――」

②

「――俺は、まぁいつもどおりだな。勉強は理系を除けば問題ないし、奉仕部も特筆すべきことはないなぁ……」
「……ちょいちょい比企谷くん。それだけだと会話が終わっちゃうよ」
「そ、それもそうか。――会話を広げる下手さにかんしては折り紙つきだからな、俺」
「ふふ。自慢することではないけどね。……この前、理系が苦手なのは聞いたけど、やっぱり高校の勉強は難しいのかな？」
「そりゃあ、中学に比べたら勉強の範囲も質も違うだろうけど、高校生相応の難易度であって、高校生になっちまえば別になんもないと思うけどな。……まあ、俺は理系捨ててるがなっ！」
「これも胸はって言えることではないんだけどなぁ……。その、なんで理系がきらいなの？」
「難しいから」
「さ、さっき言ったことと矛盾してない……？高校生相応の難易度ではなかったの……？」

「……ま、まぁ俺にとっては難しいってだけで、船見にとっては楽勝だと思うぞ。成績だって悪くないんだろ？」
「悪くはないけど、総武高に行けるだけの学力はないよ。……あれ？それなら、高校受験のときは理系科目大丈夫だったの？」
「あのころはまだ苦手意識持ってなかったからなぁ……。高校生になってしょっぱなの数学の授業で絶望したよ。教師がなにを言ってるのかまったくわからなかった……」
「あはは……。これ以上は掘り下げないでおこう……。——それで、奉仕部はどうなのかな？」
「……ん、そうだなぁ……——罵倒される毎日だよ、ほんと」
「えっと、それってたしか部長さんのことだよね？」
「ああ。部室に入室するたびに俺の名前を改変して罵倒してくるからな、あいつ……。蔑称のレパートリーどんだけあるってんだ……」
「ふふっ。……でもさ、良いじゃん。きっと部長さんも悪気があってやってるわけじゃないと思うし、ぜったい比企谷くんと会話するのがたのしいんだよ」
「悪気がないなら余計にたちが悪いんだよな……。ま、罵倒されるのはむかしから慣れっこだ。小中の同級生たちの罵詈雑言に比べりゃ、あいつの悪口なんてかわいいものさ」

「そ、その……ごめん。自虐ネタは反応に困るよ……」
「っと。……すまん。――でも、自虐ネタが許されるなら俺はいくらでも語れると思うぞ」
「うーん……けど、一方的に自虐ネタを語られるのは、会話とは言わないと思うけどね……」
「もっともだ……」
「――あ、コーヒーとケーキがきたよ。さっそく食べよっか」

＊　＊　＊

「ここのコーヒーは相変わらずおいしいね」
「うん。うまい」
「……比企谷くん、マックスコーヒーがすきだよね？ブラックで飲んでるみたいだけど、砂糖とか入れなくても良いの？」
「確かにコーヒーは甘党なんだが、ここのコーヒーはブラックでもいけるんだよな。……なんつーか、苦いはずなのに、どこか甘みがあるっていうか……」
「あ、わかるわかる！おいしいコーヒーって、ブラックでもなぜか甘いよね。苦味のあとに、こう……ふわぁ……っと甘みが漂ってくる感じ」
「そうそう。マックスコーヒーも好きだけど、これはこれで良いよな」

「…実はさ、コーヒー、自分で淹れてみようと思っててね……前から興味があって、いまいろいろ調べてるんだ」
「おっ、そうなのか。自分でつくるとなると、けっこうハードル高い感じがするな……あ。いやっ、否定してるわけじゃなくてだな……」
「ふふっ。大丈夫、わかってるよ――その、調べてみるとね、案外難しくはないみたいなんだよ。……えっと、必要なのはね、コーヒー豆、ミル、ケトル、ドリッパー、フィルター、あとはコーヒカップくらいかな」
「……ドリッパーってのは？」
「コーヒーフィルターをセットする台みたいなものだね。ドリッパーにフィルターを装着して、コーヒーカップの上に置くの。そしてフィルターにミルで挽いたコーヒー粉を入れて、うえからケトルでお湯を注ぐって感じかな」
「おお、なんだかおもしろそうだな」
「でしょでしょ？……わたし、ゲームくらいしか趣味がなかったから、新しい趣味をつくりたいなぁって思ってて」
「……新しい趣味かぁ。良いなそれ」
「比企谷くんは趣味とかある？」
「俺か？……うーん。俺はなぁ――」

③

「――特に趣味ってのはないかもなぁ。もちろんゲームもすきだし、ほかにもすきなことはあるっちゃあるけど、それが趣味かって言われたら難しいところだな。……しいて言うなら読書が趣味だと思う」
「比企谷くん、本すきだもんね」
「ん？そんなこと船見に言ったことあったか？」
「この前ね、ここで比企谷くんがわたし待ってくれていたときに、真剣な顔で本を読んでたのを外から見たから、本がすきなのかなぁって。それに……雰囲気、かな。……あ、別に悪い意味ではないんだけどね――比企谷くん、友達と外で遊ぶよりかは、おうちで本を読んで過ごしてそうだから」
「なるほどな……いや、その通りだよ。俺がともだちと遊ぶとか、天地がひっくり返っても考えられんことだ」
「……でも、いまは？」
「ん？」
「いま、わたしとこうして話をしているのは、『ともだち』と遊んでることって捉えるこ

とができない……かな？」
「んんっ。……まあ、うん……そう、なのか？」
「その、わたしは比企谷くんのこと……良き友人だと思ってるよ」
「……なんか照れるな。――こういうのは、あんまりなれてないんだわ」
「えへへ、実はわたしもちょっと恥ずかしい……面と向かってともだち宣言するのって、勇気がいるんだよ？」
「そ、そうか……――まぁ、なんだ。その、ありがとな」
「どういたしましてっ。……でも、比企谷くん。嫌だったら言ってよ」
「ん？なにをだ？」
「その……わたしとこうして遊ぶのが嫌だったら……」
「……そんなことはないから安心しろ。たしかに、俺は船見の言ったとおりインドア少年ではあるが、信頼できるやつとこうして話すのも……や、やぶさかではないから」
「っ！……そっか、ありがとう。照れちゃうな。――比企谷くん。これからもよろしくね」
「……おう」

＊　＊　＊

「比企谷くんはどういう本を読むの？」

「俺か？ふむ……けっこういろんなのを読むぞ。日本文学も海外文学も、エッセイとかライトノベルとかも」
「へぇ、たくさん読むんだね。……わたしは文学は有名どころしか読まないかなぁ。夏目漱石とか」
「おぉ。俺も夏目漱石はわりと読むぞ」
「どの作品が好き？」
「俺は、無難だけど『こころ』かなぁ……」
「あ、良いよね、『こころ』。私でも読みやすいし、少し暗いお話だけど、わたしもすきな作品だな」
「そう、そうなんだよ……あの根底にながれる退廃的な雰囲気があの作品の魅力なんだよな。そんで『先生』が語ることばは人間の本質をよくとらえてあると思う」
「もう一回読んでみようかなぁ」
「いいな、俺も読み返すか……しかし、その年で夏目漱石を読むのはすごいと思うぞ」
「そうかな？でも、文学は本当に有名どころだけで、後はミステリーとかライトノベルとかかな」
「えっ……ライトノベル、読むのか？」
「？うん」

「それは意外だった……」
「そ、そう？学園もの好きだけど、異世界転生ものとかもよく読むよ」
「おぉ……なかなかディープだな……これは語り合えそうだ――」

④

「――俺が思うに、ライトノベルの良さってのは、自由奔放なところにあると思うんだ」
「自由奔放？」
「そう。筆者が自分の欲望に忠実に書いていることが魅力的なんだ。もちろん、一〇〇パーセント欲望のままに書いてるわけではないんだろうけどな。……それでも、筆者の妄想をぶちまけた世界を覗いてみるってのは、なんだかテーマパークに行くみたいでワクワクするんだよなぁ。――俺はテーマパークに行く機会がそもそもなかったけどな」
「……最後のひとことは置いておくとして、たしかにライトノベルって、ほかのジャンルの本よりも自由度が高い気がするなぁ。比企谷くんの言うとおり、筆者の妄想が文字に起こされた世界に触れるのは、そのひとが建てたテーマパークに行くようなものだね」
「ああ。……だれしも自分だけの妄想の世界があるものだと思うが、そのひとのあたまのなかを覗いてみたいなら、一番手っ取り早いのは当人が書いたライトノベルを読むことだろうな。……もっとも欲望に忠実な本のジャンルだと思うから」
「なるほど……。そうとらえるとますますライトノベルを読むのがたのしくなりそうだなぁ。――妄想の世界、か。……確かにわたしにもそういう世界があるや」

「お、これまた意外だな。船見も妄想とかするのか？」
「するよするよ。ゲームがすきだからさ、お気に入りのキャラクターになりきって、妄想の世界で敵をたおして冒険とかしてるよ」
「俺もそういう妄想はする。……でも、なんというか、たぶん船見のはかわいいもんでな……俺のはもっと『黒い』やつだったな……」
「く、黒い……？」
「ああ……たとえば、『じつは自分が神に選ばれし七人の英傑の一人で、闇の王を討たんとすべく、神から授けられた伝説の剣を手に……』うんぬんって感じだな。……待ってこれ、ものすごく恥ずかしいんだが……」
「あ、あはは……でも、わたしも似たようなものだと思うよ？」
「そう言ってくれるとありがたい……。俺がいまの船見のころなんて、こんな妄想ばっかしてたぞ。……英雄の一人とか、奇跡の魔法使いとか。——ああ、黒歴史だ……」
「掘りかえしちゃってごめんね……。——でもさ、ライトノベルで成功しているひとたちって、大人になってもそういう妄想をやめなかったからこそ、いまおもしろい作品が書けてるんじゃないのかな？」
「……うん、そのとおりだと思う。妄想は一面では恥ずかしいと思われがちだが、別の面で見れば、すぐれた才能の一つには違いないな」

「――そうだっ。……比企谷君もライトノベル、書いてみるのはどう？そうすればさ、恥ずかしい記憶だと思わなくてすむんじゃないのかな……？」
「……うれしいことばをありがとう。……じつはさ、知り合いにライトノベルを執筆しながら、俺に添削を求めてくるやつがいるんだが……自分で書くというのもなかなかにおもしろそうだな。」
「そうなんだ！……じゃあ、比企谷くんが書いたら、わたしに一番に読ませてねっ」
「……そ、それは恥ずかしいな……。――まあ、うん。考えておくわ」
「ありがと。……ふふっ。比企谷くんの世界を覗くの、たのしみだな――」

＊　＊　＊

「――けっこう話し込んだな」
「そうだね。……日も、暮れたね」
「……よし、こんくらいにしとくか。……その、きょうはありがとう。まあ、うん……たのしかった、わ」
「どういたしましてっ。……わたしもすっごくたのしかったよ。コーヒーもモンブランもおいしくて、やっぱりここで比企谷くんと話すはたのしい。……次回も会うときは、ここで良い？」
「ああ、わかった。次はいつにする？」

「うーん……じゃあ、一ヶ月後で良いかな？……じつを言うとね、あんまり頻繁に会うと、友達が『彼氏できたのかっ！』ってからかってくるからね」
「そ、それは申し訳ない……」
「う、ううん！そういうわけじゃなくてねっ……比企谷くんと話すのがたのしいのは本当だよ。……だから、また、ここでおしゃべりしようね」
「……おう、わかった。――それに、きょう会ったときにも話したけど、会いすぎたら話題がなくなっちまうからな」
「ふふ。そうだね」
「――駅まで送ってくわ」
「――ありがとう、比企谷くん」

＊　＊　＊

「……いろいろとありがとう。また、一ヶ月後に……あのカフェで会おう」
「うんっ。比企谷くんも、ここまで送ってくれてありがとうね。……それじゃあ――元気でね」
「……おう」

⑤

「――ごめんっ！待たせちゃったかな……？」
「――いや、さっき来たばかりだから大丈夫だ」
「ありがとう……。でも、ごめんね。読書の邪魔もしちゃったみたいだし」
「気にすんな。――それより、ひさしぶりだな」
「――そうだね。ほんとうにおひさしぶり。この前からちょうど一ヵ月になるね。……比企谷くん、変わってなさそうで安心したよ」
「おう、そっちもな。……注文、どうする？」
「比企谷くんはなに頼むの？」
「俺はいつものブレンドと……きょうはショートケーキだな」
「いいねっ。わたしもそれにする」
「了解――すみません。ブレンド二つとショートケーキ二つ、お願いします」

＊　＊　＊

「……一ヵ月も会ってないとなると、やっぱひさびさな感じがするな」
「うん。……変わってなさそうとはさっき言ったけど、実際、比企谷くんはどんな一ヵ月

だった？」
「いつもどおり学校行って、部活して、家帰って、ごろごろって感じだな」
「わたしもそんな感じだったよ。でも、わたしの場合は部活中もごろごろしているようなものだけどね」
「まぁ俺も本読んでるだけだがなぁ……たまに依頼が舞い込んでくることもあるが」
「依頼……そういえば、まだ奉仕部の活動について詳しく訊いてなかったね。……どんな依頼がくるの？」
「そうだな。……クッキーをつくるの手伝ってくれとか、ライトノベルの添削をしてくれだとか、不良少女の更生をしてくれだとか……正直、自分でもなにをやってるのかよくわからん」
「おお……最後の依頼がとても気になるな……すごいスケールの大きな依頼もくるんだね」
「厳密に言えばそいつは不良ではなかったんだが、毎日夜遅くまでバイトをしててな……なんとかもとの生活に戻そうとしたって感じだな」
「なるほど……依頼は解決したの？」
「まあな。金に困ってたやつだったから、奨学金について話したら、バイトもやめたよ」
「さすが、比企谷くんだ」

「……別に、俺だけの力じゃなかったさ。みんなで案を出し合ったしな」
「それでも、すごいことだよ。……ひとのためになにかするって、とってもすてきなことだと思う」
「そ、そうか……まあ……その、ありがとう……うん。――……ふ、船見の部活はどんな感じなんだ？ごらく部ではどういったことをしているんだ？」
「うーん……ほんとにだらだらするだけだよ？おしゃべりしたり、お茶を飲んだり、宿題したり、たまに本を読んだりって感じで……比企谷くんの部活に比べたら、なんにも生産的なことはしてないよ。……そう考えると、私はひとのために努力しているってことはないかなぁ」
「……別に、だれかの手助けをすることが良いことのすべてじゃないと思う。ともだちと遊ぶことだって十分大切なことだ。……お、俺が船見と話していることがたのしいように、生産的じゃなくても大事なことだって世のなかにはたくさんあるはずだ」
「……比企谷くん、ありがとう。……えへへ、照れちゃうな。……わたしと話すことがたのしい……か。……とってもうれしいよ」
「……まあ、うん……なんだ……とにもかくにも、船見がごらく部で充実してるみたいで良かった」
「……ありがとう。――あ、コーヒーとケーキが来たみたい。きょうはショートケーキ、

たのしみだなぁ」

＊　＊　＊

「――モンブランも良いけど、ショートケーキもうまいな」

「だよねだよねっ。生クリームもおいしいし、なによりイチゴが甘くてほっぺたが落ちちゃいそう」

「……ケーキ自体そんなに詳しくないんだが、船見が一番すきなケーキはなんだ？」

「わたしはねぇ……うーん……難しいな……ショートケーキもチョコレートケーキもすきだし、チーズケーキもシフォンケーキもお気に入り。ケーキならなんでもすきかなぁ。……でも、いちばんを決めるなら――モンブラン、かな」

「おお、良いな。……このまえ食べたモンブランはどうだった？」

「ものっすごくおいしかった。……ここはコーヒーはもちろんのこと、ケーキも侮れないよ」

「そうだよな。たしかにこないだ食べたモンブランは至福だった。あのほど良い甘さがブラックのコーヒーによく合っていた」

「わかるわかる。……わたしね、マックスコーヒーとかの、あえて甘くしたコーヒーはのぞいて、コーヒーに砂糖を入れるのが苦手なんだよね。コーヒー本来の苦味と甘味が、すこしでも砂糖を入れるだけで消えちゃう気がするの。ケーキといっしょだと、不思議

とそんなことはないんだけどね」
「なるほど……言われてみればそうだな。俺も、昔はコーヒーを飲むときに角砂糖を何個も入れてきたけど、ここでおいしいブラックコーヒーを飲んでからはわざわざ砂糖を入れなくなったな。……まえに船見が話してくれたように、ブラックコーヒー自体にほんのりとした甘さがあるからな」
「うん。……でも、ケーキの甘さはコーヒーの苦味や甘味を阻害しないんだよね。不思議だけど」
「……コーヒーも、奥が深いんだな」
「――それでね、比企谷くん。わたし、この一ヵ月のあいだに、少しずつコーヒーの道具を揃えて、自分で淹れてみたの」
「おお!……それはすごいな。……それで、自分で淹れたコーヒーは、どうだった?」
「もちろん、ここのコーヒーには劣るけど――それでも、自分で豆を挽いて淹れたコーヒーは格別だったよ。自慢するわけじゃないけど、ここまでかって思った。……ドリップバッグってあるでしょ?あれももちろんおいしいのはおいしいんだけど、いったん自分で豆から淹れたコーヒーを飲んだら、ドリップバッグじゃ満足できなくなっちゃった」
「そうなのか……船見が淹れたコーヒー、いちど飲んでみたいなぁ」

「っ!!ぜひ飲んでみてよっ。今度、魔法瓶に入れて持ってくるね。あれ、でもカフェに自前のコーヒーを持ってくるのは良くないな……。――そうだ比企谷くん。ウチに来ない？」
「……え？」
「わたし、ひとり暮らしだしさ。いつでも来てもらって構わないよ」
「……い、いやいやいや。流石にひとり暮らしの女子の部屋に男一人が入るのは良くない。ほんとうに良くない」
「そうかな？比企谷くんなら信用できるし、私はまったく問題ないけど……」
「その……申し訳ないけど、船見が良くても、俺が良くないってのと、世間的にもアウトだと思う……すまん。――そうだな……次はここの近くの公園で会おう。それで、そのときにコーヒーを持ってきてくれないか？」
「そ、そんなに謝らなくても大丈夫だよ……こちらこそごめんなさい。……うんっ。公園で会うの、良いね。がんばって淹れてくるね、比企谷くん」
「……おう。たのしみにしてる」

⑥

「ひさしぶり、比企谷くん」
「ひさしぶりだな、船見」
「今回は一ヶ月以上空いちゃったね」
「お互い予定がなかなか合わなかったからな」
「本当にきょうは公園で良かったの？わたしの部屋でもまったく構わないんだけど」
「前にも言ったけど、男女二人きりというのは個人的にも世間的にも良くないと思ってな。申し訳ないけど、きょうのところは公園で勘弁してくれ」
「そんな、謝らないでよ。比企谷くんはなんにも悪くないわけだし。それに、比企谷くんにぜひとも飲んでほしかったからね。ちゃんと魔法瓶に入れて持ってきたよ」
「サンキューな」
「あと、コーヒーだけじゃ物足りないと思って、クッキーも持ってきたよ」
「わざわざすまないな。ん？そのかたちと感じ、もしかしてクッキーも自分でつくってきたのか？」
「うん。あんましうまくできなかったけどね」

「いやいや……本当にありがとう。しかしクッキーまでごちそうになるとはますます申し訳ないな。今度カフェで会うときはこっちがごちそうするよ」
「良いの良いの。そうだ、それなら代わりに、この前にも言ったけど、もし比企谷くんがライトノベルを書いたら、わたしに読ませてね」
「うっ、覚えていたか。実は船見と会っていないあいだに、少し書いてみたんだ、ライトノベル」
「おお！書いてくれたんだ。ぜひ読んでみたいな」
「でもな、他人の添削をしているわりには、いざ自分で書いてみると、なかなか筆が進まないんだ。まずストーリーを練るのが大変だ。ちゃんとつくろうとしても、どうしてもいままで読んだことのある作品の模倣になってしまう」
「たしかに、オリジナルのストーリーを創造するのってすごく大変そうだよね」
「添削していたわりに、自分ではうまく書けないのがすごい悔しい。書くことと評価することは別ものだってつくづく実感したよ。いずれにせよ、船見に見せられるレベルまでには到達していない。すまないけど、気長に待っていてくれないか」
「もちろんだよ。催促するつもりはないよ。無理しなくて良いからね」
「でもいつか作品を書き上げたら、最初に船見に読んでもらいたいな――おっとっと。それより、まず船見が淹れてくれたコーヒーが先だな」

「ふふ、コーヒーのことをすっかり忘れていたよ。じゃあ、飲んでもらおうかな」

＊ ＊ ＊

「はい、どうぞ」

「ありがとう。じゃあ、いただきます――……うん、おいしい。すごくおいしいよ」

「良かった。緊張しながら淹れたから、心配してたんだ」

「前にも話したけど、ブラックで飲んでるのに、甘みがあるな。それに、あの喫茶店のコーヒーと同じくらいにおいしい。もしかしたらこっちの方が甘みがあるか？」

「コーヒーショップに行って、なるべく甘い豆を選んだの。比企谷くん、マックスコーヒーが好きだから、なるべくブラックのでも甘味が強いのが良いと思って」

「そこまで考えてくれたのか、ありがとう。それにしてもだ、すごくおいしいぞ、これ。これ以上語彙が出てこないのが申し訳ないくらい」

「たくさん練習したんだ。豆の挽き具合で味が変わるから、一番おいしい挽き方はどれか試したり、ドリップするときは手がブレちゃうから、なるべくブレないように淹れる方法を試したりしたの。比企谷くんにはいまのベストのコーヒーを飲んでもらいたかったから」

「なんだか照れるな――クッキーももらって良いか？」

「もちろんだよ」

「じゃあ、いただきます――これもうまい。甘さが控えめで、コーヒーの邪魔をしていない」
「ふう、良かった。こっちはあまり練習できてなかったから。コーヒーもクッキーもまだまだあるから、良かったらどうぞ」
「じゃあ、遠慮なくいただきます」

＊　＊　＊

「ごちそうさまでした」
「おそまつさまでした」
「めちゃめちゃおいしかった。やっぱり船見は才能があるな」
「えへへ、ありがとう。また練習するからさ、良かったらまた淹れてきて良いかな？」
「もちろん。楽しみにしてる。きょうは本当にありがとう」
「どういたしまして。今度はもっと早くに会えたら良いね」
「そうだな――じゃあ、またな」
「またね」

⑦

「――ごめん！待たせちゃったよね。貴重な休日なのに、遅れちゃってほんとにごめん」
「気にするな、俺も遅れてきたから。たまたま先に着いただけだ」
「それでもごめんね。もう比企谷くんはなにか頼んだ？」
「いや、まだだ。それよりさ、えっと……そのだな……」
「？」
「あの、その――服、似合ってるな。いつも制服姿だから、新鮮だ」
「えっ……ど、どうしたの突然？」
「すまん、気持ち悪かったよな、忘れてくれ。いや、忘れてください」
「いやいや、そんなことないよ。ただ、えっと、突然だったから――ありがとう。たしかに、お互い私服で会うのはめったにないもんね。えへへ、うれしいな」
「その、もちろん私服は似合ってるんだが、理由があってだな――出かける前、妹の小町に『今日は休日に結衣さんに会うんだから、私服、褒めないとダメだよ』って言われてな――いや、そう言われはしたけど、ほんとに似合ってるんだぞ」
「ありがとっ。比企谷くんも、私服姿、かっこいいよ」

「お世辞は良してくれ」
「お世辞じゃないよ、ほんとに似合ってるよ」
「……ありがとう。実は小町にコーディネートしてもらったんだ。『小町が結衣さんに相応しい服装を選んであげる』ってな」
「そうなんだ。本当に比企谷くんは妹さんと仲が良いんだね。羨ましいな」
「まあ、世界一かわいい妹だからな。ただ、小町には『お兄ちゃんと血がつながってなかったら、学校が同じでも一度も話さないただの他人だったと思う』って言われてるよ」
「結構キツい言葉だね……」
「それでも、そのとおりなんだ。俺が小町と血がつながっていない赤の他人だったら、きっと小町に告白して玉砕して、それからは金輪際話さない仲だったと思う」
「玉砕しちゃうんだ……」
「でもさ、他人だとしたら話さない仲でも、『兄妹』だから話せるって、なんだか不思議なことだと思うんだ――『兄妹』だから見捨てないでいられる。『兄妹』だから一緒にいられる――血が繋がっているだけで、結びつかないものが結びつき合う。不思議なことだ」
「不思議で、そしてすてきなことだよね、『兄妹』でいられるって――ああ、ますます羨ましいな」

「もちろん、一長一短だけどな。船見は兄弟姉妹がほしかったのか？」
「うん、わたしは比企谷くんと同じで妹が欲しかったかな。親戚にちっちゃい女の子がいるんだけど、それがかわいくってかわいくって。たまにうちにくるんだけど、懐いてくれていてね」
「気持ちはとてもわかるぞ。妹はかわいくて仕方がない――ちなみに小町はやらないぞ」
「あはは、わかってるよ。比企谷くん、妹のことになるとアグレッシブになるよね」
「妹が嫁に出る日には多分号泣すると思うぞ」
「本当に妹さん想いだね」
「そう思ってくれることがどれだけありがたいことか――他のやつらは異口同音で言うからな、『シスコン』って」
「シスコンも、良い意味で捉えれば妹想いだよ」
「船見のやさしさがこころに染みる……」

＊　＊　＊

「それにしても、今日は休日だけど良かったの？比企谷くん、休日はゆっくりしたいんでしょ？」
「そうだけど、平日だとお互いなかなか予定が合わないからな。それに、この前公園で

会った時はひさびさすぎたから、今回は間隔狭めて会おうって決めてたしな」
「ありがとね。公園で会ってから、二週間ぶりくらいだっけ？」
「それくらいだな。今後は休日に会うのも良いな。いや、船見が良ければなんだがな」
「わたしも休日に会うの、良いと思うよ。休日は、たまに友達と遊ぶかゲームするか、ぐらいだから、空いてる日が多いし」
「サンキューな――おっと、話しすぎた。そろそろオーダーしないと」
「そうだったね。なににしようか――」

⑧

「――じゃあ俺はチョコレートケーキとブレンドにする」
「わたしもそれにしようかな」
「了解――すみません、チョコレートケーキ二つとブレンド二つ、お願いします」

＊　＊　＊

「やっぱりここは落ち着くな」
「そうだね。会うときは大体ここだもんね」
「学校からは遠いのに悪いな」
「前にも言ったけど、ここのカフェ気に入ってるし、席と席の間隔が広いから、他人に自分の話を聞かれなくて良いからすきなんだ」
「なら良かった。たしかに他人に自分の話を聞かれるって、ちょっと恥ずかしいよな」
「恥ずかしいってのもあるけど、わたしの話を聞いた誰かに、あたまのなかでわたしの話やわたし自身についてあれこれ想像されることがすごい嫌なの。わたしが神経質すぎるだけかもしれないけれど、プライベートの会話や自分自身が、知らない赤の他人の想像の対象にされることが怖くて仕方ないの――ごめん、説明下手で。わたし、なに言っ

てるんだろうね」
「いや、ぼんやりとだけど、理解はできる。他人に自分を想像されるって、なんだかプライベートスペースが揺るがされて、大事なものが流出した気持ちになるよな」
「そうそう。わたしの場合、それが神経質なレベルで気になってさ。女子校を選んだのも、この考え方が要因の一つなのかもしれない。特に男子にあれこれ想像されるのは嫌だから」
「俺は大丈夫なのか？」
「比企谷くんは友達だし、わたしのプライベートゾーンの範囲だから、問題ないよ。それに、異性が苦手ってわけではないし。ただ、自分を想像されることが苦手なだけでね」
「なるほどな」
「面倒くさい人間だよね、ごめん」
「いや、まったくそんなことはない。誰にだって神経質なところや変えられない性格はあるさ」
「ありがとうね――あっ、コーヒーとケーキが来たみたいだよ。暗い話を甘いもので塗り替えよう」

＊　＊　＊

「比企谷くんは映画、すき？」

「おう、すきだぞ。動画配信サービスで観たり、たまに映画館に行ったりもするぞ」
「そうなんだ――あのさ、比企谷くん。良かったらなんだけど、今度映画観に行かない？」
「おう、いいぞ」
「えっ……結構あっさりだけど良いの？」
「もちろん、断る理由なんてないからな」
「良かった――あのね、それでなんだけど、映画は映画でも、ミニシアターで映画を観たいなって思ってて」
「ミニシアター？」
「街のなかとかにある、スクリーンが一つか二つの小さな映画館のこと。昔の映画とか、マニア向けな映画を上映しているの。前から気になっててさ、でも一人ではなかなか入る勇気がなくって……」
「おもしろそうだな。ぜんぜん構わないぞ」
「ごめんね。あと、この近くにはないから、少し遠出になるけど良い？」
「大丈夫。俄然、行ってみたくなってきた」
「ありがと。大きい映画館よりかは少ないけど、一日に何本か上映してくれるの。比企谷くんはどんな映画がすき？」

「そうだなぁ――」

⑨

「俺は邦画をよく観るな。最近上映された映画は、ちょっと待てば動画配信サービスで配信される場合が多いから、そうやって大抵の映画は観てる。気になる映画は待てないから映画館に直接行くけどな」
「たしかに最近の映画って、ちょっと我慢すればそういうサービスで観られるようになってるよね。経済的で良いよね」
「もちろん、大きいスクリーンで観たいときもあるけどな。船見はどういう映画を観るんだ？」
「私は最近は古い洋画を観るかな――しかもとびきり古いの」
「古いったってどれくらいだ？」
「二〇世紀初めから、中頃くらいの映画かな」
「それはまた、えらい古いな」
「うん。別にカッコつけてるわけでもなくてね、ただ単純におもしろいんだ、昔の洋画って」
「へぇ、意外だな。どういうところがおもしろいんだ？」

「わかりやすいストーリーの映画が多いし、技術がいまに比べて乏しかった分、当時の技術を最大限に活用しているところとかかな。あと一番良いところは、役者の演技力というか、存在感というか、とにかく役者中心に映画が進んでるところかな。あくまで、わたしの実感だけどね」

「役者中心？」

「うまく説明しづらいけど、昨今の映画って、技術やシナリオの凝り具合が発達してるから、映画一つにしても、役者以外の様々な大きい要素が絡まっているように思えるんだ。それこそ、一定の演技力を持つ役者であれば、誰でも成り立つみたいにね。でも、昔の洋画って、技術もシナリオの凝り具合もいまよりは乏しかったから、役者の演技力や存在感が、映画の大きな要素だったように思えるんだ。実際、昔の洋画の俳優女優は、現在とは比べものにならないくらい、オーラがあったように思えるの」

「なるほど。たしかに、『ローマの休日』なんかは、シンプルなストーリーだけど、役者の存在感はすごかったな。なんというか、そこにいるだけで役者を超えている、というか」

「そうそう！やっぱり比企谷くんとは話が合うよ。『ローマの休日』は存在感の最たるものだよね。特にオードリー・ヘップバーンにはとても憧れる……」

「俺は妹のことになるとアグレッシブになるらしいが、船見は映画のことになると熱く

なるな」
「はっ！ご、ごめん」
「いやいや、悪い意味ではなくて。ただ、船見のウキウキな姿はなかなか見られないから」
「ちょっと恥ずかしいな――まあ、とにもかくにも、昔の映画には最近ハマってるね。大体の映画は著作権自体が切れてるから、比企谷くんが言ったような動画配信サービスで無料で観られるよ」
「興味が出てきた。オススメの映画、あるか？」
「うーん、そうだね、『或る夜の出来事』とか、『哀愁』とかがおすすめかな。あとはすごい長編だけど、『風と共に去りぬ』とか」
「ありがとう。大抵休日は暇だから、今度観てみるよ――もちろん、社交辞令じゃないぞ」
「ありがとう――」

⑩

「それにしてもさ」
「ん？」
「俺たちって、出会った頃に比べたら随分話すようになったよな」
「そうだね。出会ってすぐなんて、お互いシャイだから、なかなか言葉のキャッチボールがつづかなかったよね」
「いまでも覚えているからなぁ。はじめてこのカフェに集まったとき、船見が開口一番に『えっと……すきな食べ物ってなんですか？』って訊いてきたこと。突然すぎてびっくりしたし、お見合いかと思ったぞ」
「は、恥ずかしいからやめてよ。あのときは緊張しすぎてなにを話せば良いかわからなかったんだ。それで、なぜか比企谷くんの好物を訊いてしまって……」
「すまんすまん」
「でも、それで比企谷くんが『マックスコーヒー』って答えてくれて、そのあとは割と会話は弾んだよね」
「そうそう、それで、船見がマックスコーヒーを知らなかったから、俺が力説して……あ

あ、そうだった。マックスコーヒーへの愛を語りすぎて、船見に引かれたんだった。黒歴史を思い出してしまった……」

「ご、ごめんごめん。それに、引いてなんかいないよ。寡黙だった比企谷くんが突然たくさん話し出したから、少しびっくりしただけだよ」

「それを世間では『引く』と言うんだけどな……」

「過去を振り返った結果、お互い恥ずかしい記憶を思い出しただけだったね。もうこの話はやめにしよう……」

＊　＊　＊

「すきな食べ物と言えば、マックスコーヒー以外になにがあるの？」

「そうだな、ミラノ風ドリアかな」

「サイゼの？あれ美味しいよね。わたしもサイゼに行くときはよく食べるよ。安いしおいしいし」

「そう思うよな！サイゼのミラノ風ドリアは、人類が生んだ最大の発明の一つであってだな、なぜあの値段であれだけのクオリティが出せるのか……はっ！また俺は調子に乗って力説するところだった……ひ、引いた？」

「引いてない引いてないよ。たしかにミラノ風ドリアはおいしいし、語りたくなる気持ちもわかるよ」

「良かった。しかし船見、話がわかるな。ミラノ風ドリアを知っているとは」
「家でもたまにだけど食べるからね」
「家で？デリバリーでもあるのか？」
「比企谷くん、知らなかったんだね――えっとね、ミラノ風ドリアのソースって、市販で売ってるんだよ」
「なん……だと……」
「グラタン用のお皿ってあるでしょ？あれにバターを塗ったあと、炊いたご飯をいれて、その上からミラノ風ドリアのソース、あとはお好みでチーズを入れて、オーブントースターで焼くの」
「そ、それでミラノ風ドリアができるのか？」
「うん。流石にサイゼほどのクオリティは出せないけど、十分に美味しいミラノ風ドリアが食べられるよ」
「いまのいままで生きてきて、家でつくれるなんて知らなかった……船見、ありがとう。ほんとうにありがとう」
「ど、どういたしまして」
「ミラノ・トークで盛り上がっていたら、もうこんな時間だな。今日はお開きにするか」
「そうだね。きょうはずっとハイテンションな比企谷くんが見られて良かったよ」

「は、恥ずかしい……」

＊ ＊ ＊

「きょうもサンキューな。特に、ミラノ風ドリアが家でつくれることを教えてくれてありがとう」

「うん。比企谷くんも、きょうは服を褒めてくれてありがとうね」

「うっ、覚えていたか」

「人間、うれしいことは覚えているものだよ。それじゃあ、またね」

「またな」

⑪

「ひさしぶり、比企谷くん。待たせちゃったかな？ごめんね」
「いや、さっき来たところだから大丈夫だ。まだ十五分も前なのに、船見も来るのが早いな」
「この前も待たせちゃったからね。結局また遅れちゃったけど」
「集合時間より早いからまったく問題ないけどな――それにしても、その、だな、きょうも似合ってるな、服。いつも以上に似合ってる気がする」
「ふふ、ありがとう。私服でスカートはめったに履かないけど、今日は着てみたの。褒めてくれてうれしいな」
「フレアスカートっていうのかな。上品で女の子らしいと思う。ああ、気持ち悪くてごめん」
「ううん、うれしいよ。妹さんにアドバイスされたの？」
「服の褒め方もそうだけど、エスコートの仕方までレクチャーされたよ。完全にデートと思い込んでやがる――でも、似合ってるのはほんとうだからな」
「えへへ、ありがと。きょう行くミニシアターはここから電車で三〇分くらいかかるけ

ど、大丈夫かな?」
「まったく問題ないぞ。きょうはどんな映画を観るんだ?」
「着いてからのおたのしみということで。なにを観るかいろいろ悩んだけど、比企谷くんがすきそうな映画かな」
「それはたのしみだな」
「期待しすぎないでね。持ち上げておいて、期待値以下だったときに申し訳ないから」
「了解」

＊　＊　＊

「ふう、着いたね。比企谷くん、ありがとうね」
「どうしたんだ?」
「車内であえて話しかけないでくれたでしょ。わたしが自分の話を他人に聞かれることが苦手だから。気を遣ってくれてありがとうね」
「まあ、電車のなかで話すのは多少迷惑だし、そもそも三〇分も会話を続けられる自信がなかったからな」
「それでもありがとう」
「船見はよくお礼を言ってくれるな。どういたしまして——それで、ここがミニシアターか。ほんとに街のなかにポツンとあるんだな」

「ワクワクしてきたよ。上映時間から逆算してここまで来たから、ちょうど良い時間だ。さあ、なかに入ろう――」

＊　＊　＊

「おお、今日観るのは邦画か。しかもこれ結構昔に流行った映画だよな」

「比企谷くん、邦画の方がよく観てるから、この映画が良いと思ってね。あ、もしかして観たことある？」

「いや、観たことないぞ。ちょうど気になっていた映画だ」

「良かった。学生二枚お願いします――」

「これくらい払わせてくれ」

「いやいや、自分の分は自分で払うのが、自然にできた私たちのルールでしょ。映画のチケットくらい払えるから大丈夫だよ」

「船見が良いならそれで良いんだが――まあ、この前作ってくれたコーヒーとクッキーのお礼はいつかさせてくれよ」

「律儀だね、了解――さあ、映画を観ようか」

＊　＊　＊

「――ミニシアターって、良いな」

「だよねだよね！なんというか、映画館自体は小さいのに、なんだか贅沢をした気分にな

れたよね」
「そうそう。小さい分、客の数も少ないし、より集中して映画を観られることができたよな。映画自体も面白かったし、ミニシアターの醍醐味が知れて良かった。ありがとうな、船見」
「わたしもたのしかったな。また機会があれば一緒に観に行かない？」

「もちろん――さて、午前中に映画を観終わったわけだが、これからのことを考えていなかったな。どうしようか？」
「とりあえずお昼ごはんにしよっか」
「そうするか。どこにしよう――」

⑫

「……なんでこんなことになったんだっけ」
「いらっしゃい、比企谷くん。さ、上がって上がって」
「――いやいや、なんで俺が船見のアパートに来ているんだ？」
「なんでって、ええと、映画を観たあと、お昼を食べようって話になって、サイゼに行こうとしたんだけど――」
「ああ、思い出した。それで、俺がまだ市販のミラノ風ドリアを食べていないって話になって」
「それでわたしが自分の部屋でご馳走するって流れになったんだよね」
「――いやいや、でもそれはおかしい。なんで船見の部屋でもてなしを受けることになるんだ？」
「だって、わたしの家にはドリアをつくる材料があるし、それにコーヒーの腕だって上がったんだよ？ぜひ比企谷くんにはまた飲んでもらいたいな」
「それは良いんだが……やっぱり、外で会った方が良くないか？男女が二人きりで同じ部屋というのは良くないと思うんだが……」

「比企谷君とわたしはともだちでしょ？それもとっても仲の良い。仲の良いともだちを自分の部屋に招待することは世間一般的に『普通』だと思うよ？」
「んん？そ、そうなのか？」
「そうそう。ともだちと部屋で遊ぶくらい『普通』のことだよ」
「そ、そうか……普通なのか……。友人を部屋に呼ぶことなんていままでなかったから知らなかった。なら、大丈夫、なの、か？」
「大丈夫大丈夫。問題ないよ」
「な、なら良いか……――」

＊　＊　＊

「こちら、自家製のミラノ風ドリアになります。どうぞお召し上がりください」
「店員口調にならなくても良いんだぞ――おお、めちゃめちゃおいしそうだな」
「ミラノ風ドリアは意外と簡単にできるんだよ。コツがあるとすれば、ライスの量はお皿に入る量より少し少なめにすると良いかな」
「ありがとう。家で作るときに参考にさせてもらうよ――じゃあ、いただきます」
「熱いうちにどうぞ――」

＊　＊　＊

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした。どうだったかな？」
「正直に言って、サイゼのドリアと甲乙つけがたいレベルでうまい」
「そ、そこまで？」
「もちろん、使っている材料は違うから味も違うんだが、船見のつくってくれたドリアはサイゼでは味わえない別格のおいしさだった」
「そこまで言ってくれると作った甲斐があったよ。あ、あとコーヒーもつくっても良い？」
「もちろん。いま、すごく飲みたい」
「ちょっと待っててね――」

＊　＊　＊

「はい、どうぞ」
「おお、もう香りだけでうまそうだ」
「公園で淹れたあの日からもたくさん練習したんだ。おいしいコーヒーをつくるうえで厄介なのが豆の挽き具合と淹れ方でね。調整と練習を重ねたんだ。気に入ってもらえるうれしいんだけど……」
「そこまでしてくれたならおいしいに決まってるさ。じゃあ、いただきます――……！」
「ど、どうかな？」

「――甘いだけじゃなくて、口当たりもなめらかで、後味にほんのりとした苦味がある。色んな味があって、ものすごくおいしいよ」
「良かった……！色々ブレンドして分かったんだけど、おいしいコーヒーって、少なくとも2種類以上の味があると思うんだ。苦味と甘味、酸味と苦味といった風にね。今回は甘いだけじゃなくて、苦味のある豆もチョイスしてみたの。気に入ってくれた？」
「もちろん。公園でコーヒーを淹れてもらった日から、コンビニコーヒーを飲んでみたり、ドリップバックのコーヒーを飲んでみたり、色々試してみたけど、このコーヒーが断然おいしいな」
「ありがとう。今後もがんばって精進して、もっと良いコーヒーを淹れたいな」
「もう十二分においしいけどな。また淹れてくれるとありがたい」
「もちろん！――さて、ご飯もたべたことだし、次はなにをしようか？」
「ええと、長居するのは悪いからもう……」
「まあまあ、仲の良いともだちの家に長居するのも『普通』のことだからさ」
「なんだか……その『普通』ってのを曲解しすぎてやしないか？どうも言いくるめられているような気がする……」
「気にしない気にしない――」

⑬

「……引き止めておいて申し訳ないけど、次になにするのか考えてないや」
「それは構わないが、ほんとうに長居して良いのか？」
「うん。一人暮らしもたのしいけど、ずっと一人でいると寂しくなるし、やっぱりともだちを呼んで一緒に遊びたくもなるよ」
「そんなもんか。まあ、俺もぼっちと言えども、小町が家にいないと寂しくなるときもあるしな」
「比企谷君」
「ん？」
「比企谷君がぼっちだとしたら、わたしは比企谷くんの『ともだち』ではないの？」
「い、いやそういうわけではなくてだな・・そんなにじっと見つめないでくれ――わかったよ、俺はぼっちじゃない。船見が『ともだち』だからな」
「ふふ、ありがとう」
「なんだか照れるな」
「そうだね、私も急に恥ずかしくなってきた――ええと、あ、そうだ。ゲームでもしない

？」
「あ、ああ。そうしよう」
＊　＊　＊
「船見は普段どんなゲームをするんだ？」
「わたしの場合はちょっと変わっててね、インディーズゲームをよくするんだ」
「インディーズゲーム？」
「誰もが知っているような有名なゲームを作っている大手のゲーム会社ではなくて、小規模で予算の少ないゲーム会社が独立して制作するゲームのことを、インディーズゲームって言うんだけど、最近はそればっかりやってるかな」
「大手ゲーム会社のゲームとはどう違うんだ？」
「比企谷くんがこの前に、ライトノベルの良さは自由奔放なところにあるって言ったように、インディーズゲームも大手ゲーム会社よりもしがらみが少ない分、より自由度の高いゲームが多いことが特徴なんだ。低予算で小規模なゲーム会社が知恵を出しながらつくったゲームは、ときには大手ゲーム会社のゲームをも凌駕することがあるんだ。わたしはそんなところに惹かれて、インディーズゲームをよくやっているよ」
「インディーズ音楽とも似たところがあるな」
「そうかもしれないね――あと、インディーズゲームの良いところは、なんといっても安

いところ。最近は大手ゲーム会社がフリーマーケット会場のようにゲームの売り場を提供していて、そこでインディーズのゲーム会社がゲームを販売することが多いから、膨大な数のおもしろいインディーズゲームがあるよ」
「なにか一つプレイさせてくれないか？」
「もちろん！比企谷くんにおすすめのゲームがあるんだ、早速やってみよう」

＊　＊　＊

「……どうだった？」
「たしかに大手ゲーム会社のゲームにはないおもしろみを感じたよ。世のなかにはまだまだ俺の知らないたのしみがたくさんあるんだな」
「良かったよ、たのしんでもらえて――まだこんな時間だね。次はどうしよっか？」
「迷惑になるし、そうそろそろ帰――……いや、まだここにいようかな、船見が良ければ」
「うん！」
「あんな寂しそうな顔されたらな。『ともだち』として帰るわけにはいかないさ」
「は、恥ずかしいな……」
「船見は俺のことを『ともだち』と言ってくれたはじめてのひとだからな」
「わたしも異性の『ともだち』は比企谷くんがはじめてだよ」
「……」

「……」
「恥ずかしいから、別の話をしないか」
「そ、そうだね――」

⑭

「……」
「……」
「そ、そういえば、最近あったかくなってきたね……」
「あ、ああ。そうだな……」
「……」
「……」
「……えっと、比企谷くん。す、すきな食べ物ってなんですか……？」
「ぶぶっ！」
「っ！ちょ、ちょっと笑わないでよ！」
「く、くく。いやだってさ、船見がはじめて会って話した第一声と同じこと言ってるんだぜ？笑わせてくれよ。そ、それにしても……くっ、ふふふ」
「は、恥ずかしい……だって、やっぱり緊張してるんだもん、改めて考えると」
「まあ、俺もそうだよ。そりゃ異性の部屋なんてはじめてだからな」
「え、そうなの？」

「当たり前だろ？まあまあ長い付き合いなんだし、わかってると思っていたが。まあ、性別問わずともだちの家にいままで行ったことなかったけどな！」
「ふふ、それ堂々と言うこと？」
「それもそうか……悲しくなってくるな。――それで、質問には答えないといけないな」
「？」
「さっき言ったじゃないか、すきな食べ物はなにかって」
「緊張でそう尋ねちゃったけど、比企谷くんはマックスコーヒーに一筋でしょ？」
「まあ、マックスコーヒーもいまだに大好物だけど――そ、その、いまは、船見の作ってくれたミラノ風ドリアも同じくらいすきでし……だ……よ……」
「……」
「……」
「ぶ、ぶぶっ！」
「あ！笑ったな！俺の勇気出したセリフを！」
「だ、だって最後に噛むから……ふ、ふふふっ。笑わせてくれたっていいでしょ？」
「さっきの意趣返しか……」
「そのとおり――ねぇ、『八幡くん』」
「えっ……？」

「ふふっ、難聴系ではないでしょ？八幡くん。いままで結構長いあいだちょこちょこ会ってきたし、こうして君はうちにも来てくれたわけだから、下の名前で呼び合うのもどうかなぁってね。もちろん下で呼び合うのが絶対的に仲の良い証拠ではないけど、それでも証にはなると思うんだ。わたしが呼びたいだけのエゴだけど、どうかな？そして、で、できればわたしのことも……だけど」

「……わかったよ、『結衣』」

「……照れるね」

「まあな……そのさ、結衣。俺には異性の知り合いがいて、実はそいつの下の名前とふな――結衣が一緒なんだ。だからなんだって話だが、それでも俺は結衣と呼ぶのは一人だけだ。いいか？」

「うん、ありがとう。でもわざわざ厳格にわけなくてもいいんだよ？さっきの話と矛盾するかもだけど、呼び方なんて自由だし」

「まあ、一種のこだわりだな――これからもよろしく、ゆ、結衣」

「……」

「あ、ニヤニヤするな！」

「さっきの仕返しの仕返し」

「む……で、でも結衣の方が一回多くないか？……まあ、いいか――そういえば結衣にど

うしても言いたいことがあったんだが」
「なになに？仕返しはもうダメだよ？」
「いやいや、マジメな話」
「そ、そうなんだ。……わかった」
「そ、そのだな……うん――さっき、結衣が『ちょこちょこ会ってきた』って言ったときの『ちょこちょこ』の口調に萌えた』
「……」
「……」
「さてっ、八幡くんが自爆したところで、次の話題に移ろうっ！」
「ま、待て！仕返しの仕返しの仕返しするつもりが逆に仕返されたぞ！ん？いや違う、待ってくれ結衣、恥ずか死させないでくれっ！――」

⑮

「――それにしても、今まで会話してきてわかってきたけど、結衣もあまり友人がいないんだな……あっ！失礼なこと言ってすまん！」
「いや、合ってるから大丈夫だよ。ごらく部のみんなとその共通のともだちぐらいしかいないからね」
「でも、結衣ならつくろうと思えばもっとできると思うんだが……」
「ふふっ、ありがとう――でもね、前にも言ったと思うけど、わたしは神経質で、他人に自分を想像されるのがあまり得意じゃないんだ。気の許したともだちなら問題ないけど、仲良くないひとに自分のことを良くも悪くもわたしの想像つかないところでイメージされるのが、どうしてもモヤモヤするんだ」
「なるほどなぁ――でもさ、人間生活している限り、他人に想像されるのはどうしても避けられないとは思うぜ。いやっ、結衣を否定してるわけではないんだが……」
「ありがと、八幡くん。八幡くんの言うとおりなんだ。自分勝手な考えなのはわかってるの。わたしだって他人に対してあれこれ想像しちゃうのに、これじゃエゴだね」
「エゴでいいじゃないか。さっきの話と矛盾するかもしれないけど、そもそも矛盾する

のが人間だとも思う。俺だって『ぼっち』を自称して強がって生きてきたけど、俺には小町がいた。高校に入って知り合いもできた――そして、目の前にいる人と『はじめてのともだち』なった。一人ぼっちをモットーにしながらいつも俺の周りには誰かがいたんだ。かと言って、友人をたくさんつくるのはしんどい。孤独はいやでも群衆もいや。そんなものじゃ、ない、の……か？」

「ふふっ、なんで最後疑問なの？」

「なんか自信なくなってきた……」

「ううん、やっぱり八幡くんの言うとおりだね。もっと曖昧で矛盾してていいのかも」

「うん、絶対的な正解なんてないからな」

「わたしの依頼を解決してくれたね」

「えっ……？こ、これって奉仕部の仕事だったのか？」

「冗談だよ冗談。でもさ、八幡くんと話してたら自然と悩みを打ち明けて、八幡くんが解決してくれた。ありがとう」

「お、おう。まあ、なによりだ」

「あれ、もう外こんなに暗い……」

「ん……もうこんな時間か。すまん結衣、きょうは帰らせてもらうわ」

「うん、また来てくれたらうれしいな」

「……ああ。またかならず来る」

＊　＊　＊

「映画、いっしょに観られてたのしかった。ミラノ風ドリアとコーヒーもうまかったよ。ほんとにありがとう」

「こちらこそ、すっごくたのしかったよ――送らなくていい？」

「大丈夫。帰り結衣が一人になるからな」

「……うん。次いつ会うかはまたメールで決めよ。……きょうもありがと。また、ね」

「ああ。また、な」

⑯

「――は、八幡くん、おまたせ。待ったかな？」
「い、いや、さっき来たところだ――今回はお互いの予定がうまく合って、はやめに会えたな。そんじゃ、なに頼もうか」
「うん！よかったよ、はやく会えて。よいしょっ――……んー。ブレンドもいいけど、ちょっとストレート試してみたい」
「ストレートってことは、単一産地の豆だけで淹れたコーヒーってことだよな？」
「そそ！おお、八幡くん知ってくれてるんだ」
「まあ、ゆ、結衣の影響で少し勉強したよ。まだ自分で豆から淹れたことはないが……」
「お金と手間暇かかるもんね。無理にしなくていいと思うよ――それに、欲しかったらわたしが淹れるので」
「……そうか。まあ、よろしく頼むよ」
「はい、よろしく頼まれます。とりあえず、きょうはいつものここで飲もう。で、えっと、ストレートコーヒーの話だったね。わたしはマンデリン試してみたいんだけど」
「ストレートの意味は知ってても豆の名前がよくわからんから、結衣と同じのにする」

「了解。ケーキは……んー、モンブランに決めました」
「じゃあ、俺は……ショートケーキに決めました」
「ふふっ。なんで真似るのさ」
「な、なんとなく？――すみません、注文お願いします。えっと……なんて名前だったっけ……」
「マンデリンだね」
「ありがとう――マンデリン二つ、それからモンブランとショートケーキ一つずつお願いします」
「いつも頼んでくれてありがとね」
「かっこよく注文できなかった……」

＊　＊　＊

「ん！うまいなこれ」
「ね！マンデリンは苦味とコクがメインの豆だけど、八幡くんの嗜好に合うと思ってね」
「そ、そうか――ん？でも俺にすすめたわけじゃなかったよな？」
「八幡くんのことだから、知らなかったらわたしに合わせてくれると思ったからね」
「よくわかってらっしゃる……」

＊　＊　＊

「そういえば、昔の洋画、観てみたぞ」
「えっ！ほんと！なになに！」
「う、うん。『七年目の浮気』ってやつなんだけど」
「おお！いいねっ！すごいいいっ！マリリン・モンローがヒロインの映画だっ！」
「お、落ち着け結衣。うれしいのはよくわかるけど、ここカフェだから」
「あ……やっちゃった……」
「まあ、今俺らしかいないからよかったけどな――というか、それも観たことあるのか」
「もちろん、最近一人のときは有名どころを片っ端から観るようにしてるんだ」
「いいな、そういった打ち込めるものがたくさんあるのは」
「コーヒーと映画だけだけどね。ゲームもすきだけど、最近はゲームをやり込む時間を映画に使っている感じかな――で、どうだった？」
「うん、うまく表現できなくてもどかしいけど、大人なコメディって感じで観ていてたのしいな。そして、マリリン・モンローが動いて話す姿を観るのははじめてだったけど、とにっかくかわいいな。天然なのか計算されているのかわからない彼女の言動がモヤモヤさせてくる」
「ね！ねっ！あ、もっと静かに話すね……そうなの、モンローの大人な魅力とお茶目なかわいさがうまく融合してて、登場する男性がみんなメロメロになっていくのは、ある意

味画一的だけど、彼女ならその過程がさもありなん、と思えるのがすごいところ。……で、やっぱりスカートが浮かんでめくれそうになるシーンは有名だよね」
「あ、ああ……あんまり男として発言は控えたいけどな」
「ふふっ。でも映画はそういうのを抜きにしないと語れないことが多いと思うな」
「まあ、そうだな……あのシーンは、その……うん、ドキドキした」
「私も『キャー！』ってなったよ」
「は、恥ずかしい――」

⑰

「――いやぁ、喋りまくったね。やっぱり映画はいいね」
「うん、おもしろいな。結衣のおかげで自分の世界が一回りでっかくなった気がする」
「わたしは自分のすきなものを友達と共有できるのがとってもうれしいよ」
「そうか……。あ、そういえば映画の話をはじめてしたとき、結衣がいくつかおすすめしてくれたと思うんだが……すまん、名前を忘れてしまった。もう一度教えてくれないか？」
「ううん、大丈夫だよ。すすめておいてなんだけど、映画に限らず芸術作品は自分がおもしろいと思えばそれが名作だと思うから、八幡くんが気になる映画を観て、それがいいと思ったら十分だと思うな。なにもわたしに合わせなくてもいいんだよ？」
「たしかに、他人の評価は気にしなくてもいいよな――まぁ、でも、『ともだち』のおすすめは知っておきたいかな」
「……わかった、それなら教えるね。八幡くんも自分が好きな作品あったら教えてね」
「おう」

＊　＊　＊

「ケーキ、おいしいなぁ——あ、そういえばわたしを待ってるときに読んでた本、ちょっと気になるな。結構集中して読んでたみたいだから」
「あぁ、これだな」
「……井伏鱒二？」
「お、読めるのか。このひと中学生でも習うっけ？」
「どうだったかな。聞いたことはあるけど、読んだことはないなぁ——ん？釣りの本なの？」
「おう。井伏鱒二の専門はもちろん純文学だが、生粋の釣り好きだったらしくてな、最近はこのひとの釣りの随筆、つまりエッセイを読んでるな」
「え、八幡くん釣り好きなの？」
「いや、実はほとんどやったことがない。でも、こういう知らない分野の本を読むのはおもしろいな。文もこの時代にしては読みやすい」
「そうなんだ——釣り、やってみないの？」
「んっ……うーん。興味はある。でも、何からはじめていいかわからん」
「そうだね、私も釣りはほとんどしたことないなぁ……。——あ、じゃあ釣り堀でやってみるのは？釣具のレンタルとかありそう」
「たしかに、よさそうだな。……結衣もどうだ？」

「え、やってみたい！いいね！」
「まぁ、俺は金があんましないから、もしかしたら安いところになるかもしれんが……」
「お互い学生だし、それにお互い初心者なんだから、安いところでも軽い気持ちでやろうよ。それに、わたし釣れなくてもいいからやってみたいな」
「まぁ、まずは経験からだよな」
「わぁ、すごいたのしみ」
「ん、待てよ。日帰りにせよ、結衣は親御さんに連絡した方がいいんじゃないのか？」
「そうだね、連絡してみる。きっと大丈夫。八幡くんも連絡したほうがいいよ？行く場所によるけど、遠出ならなおさらね」
「あ、ああ。そうだな。なんて説明しよう……」
「友人と釣りに行く？」
「信じてもらえる自信がねぇ……小町なら結衣のこと知ってるから、小町経由で連絡するわ……いろいろ訊かれる気がするが」
「？了解。計画練って行こうね」
「おう。まぁ、調べないといけないこと多いし、いまはカフェいるから、とりあえずお互い帰ってからそれについては考えるか」
「うん」

「また一回り世界が広がりそうだ」

「わたしも――」

⑱

「――あのさ、昔ラノベ書くかどうかって話をしただろ。そのことについてなんだが……」
「もしかして、八幡くんラノベ書いてきてくれたの！」
「ああ、思ったより進まないけどな。たった原稿用紙三枚、一二〇〇字だけ……」
「それでもすごいよ、創作するなんて――その、見せてもらうってこと、できる？あ、いや、嫌だったらいいんだけど……ほんとズルいね、このことば」
「いや、そんなことない。それに、結衣に読んでもらうために、この話を持ち出したからな」
「ありがとう……あのときは、結構強引に最初に読ませてってせびったと思うけど、思い返せば少し思い上がってた気がするよ」
「思い上がってなんかないぜ。俺だって、結衣が淹れたコーヒー飲みたいっったし、それならそれも思い上がりってことになる。でも結衣は俺が偉そうだとは思わなかっただろ？」
「うん、そうだね。ありがと……」

「まぁ、これを見せる俺が一番の思い上がりな気もするが……これが原稿用紙。ここでもいいし、帰ってから読んでもらっても構わない」
「せっかくだから、ここで拝読させていただきます」
「献本いたします・・・たったの一二〇〇字だが」

＊　＊　＊

「ふっふふふ。くくっく、うぶっ……」
「どど、どうした？およそ女の子がする笑い方じゃないぞ……？」
「い、いやだって……八幡くんがまさか初っ端にギャグを入れてくるとは思ってなかったから……うくく……しかもおもしろい……」
「俺自身がびっくりしてるよ、設定もプロットもしっかり考えたはずなのに、なぜがネタを冒頭に書いてしまった……まぁ、ネタのないラノベはあんまりないけど、な。いずれにせよおもしろいと言ってくれるなら、よかった……」
「ふーっ、くくくっ、ちょ、ちょっと待ってね……う、うぶっ……――ふぅ、なんとかおさまった。いや、やっぱり八幡くんのこと、まだまだ知らないな。こんなに茶目っ気があるひとだったなんて。普段がおもしろくないって言ってるわけじゃないよ。ただ、また違った八幡くんが見られてすごいうれしい。ほんとにほんと――それにこのラノベ、ギャグを入れつつちゃんとストーリーがうまく機能してる。心情表現も厚く書いてあ

るし、読んでて楽しいな……あ、偉そうだよね、ごめん」
「――い、いや、まさかそこまで褒めてくれるとは思ってなかったから、めっちゃうれし……――くくっ……うぶぶっ、くっ……やべぇ、ほんと舞い上がりそう。はじめて創作を友人に見せて、ここまで詳しく感想を言ってもらえてよかった」
「ふふっ、どういたしまして。小町ちゃんにはこのラノベを見せたの？」
「いや、これは結衣がはじめてだ。そのな……昔、中二病ノートを小町に見られてドン引きされたことがあるから……見せたというより、見られただな。いまでもベッドの上でたまに思い出して煩悶する」
「そ、そうなんだ……――あ！じゃあこのラノベ、小町ちゃんにも見せて感想もらったら」
「いやいやいやいや。そ、それはやめとく。マジで、ほんと、軽いトラウマになってるから……いまは結衣だけでいい」
「そ、そか。わかった――きょうは八幡くんの氷山の下を見られた気がするよ。失礼な言い方になるかもだけど、人間って思った以上にいろいろな側面があって深いんだね。そ、それにしても、うくっ……ツボった……いやぁ、サイコーだ、冒頭のモノローグ、主人公が――」
「ち、ちょっと待て！頼むここでは言わないでくれ！店員さんこっち見てるからっ！――

⑲

「――なんだか、お互い恥ずかしくなってきたから、そろそろここ出よっか」
「……そうしよう。お互い顔真っ赤だ」

＊　＊　＊

「あのカフェにはもうずいぶん行ったね」
「ああ……店員さんに顔を覚えられてたな」
「レジで『ありがとうございました』って言いながら笑い堪えてたよね……あのひとにいろいろ想像されたかもしれないけど、もう顔見知りだから平気かも」
「まぁ、あれでもう行かなくなるのも失礼だしな。せっかく、いいところだから」
「うん――いつもよりはやく出ちゃったけど、どうしよっか？まだそこまで外暗くないし、わたしはまだ大丈夫だけど」
「俺もまだ大丈夫だ。……うーむ。――そうだ、ケーキ食べたけど、まだおなかに余裕があるなら、一緒に食べてほしいのがあるんだが……」
「お、いいねっ。わたしもまだまだ食べられるよ」
「あんがと。たしか、こっちに歩けばあるはず……公園の近くにあると思うんだが」

「これからなにを食べるか言わないあたり、八幡くんも粋だね」
「これは粋なのか……？ま、まぁ、とりあえずついてきてくれ」

＊　＊　＊

「えっ、これって……」
「おう……ピザだ」
「ピ、ザ……？」
「ん。キッチンカー販売のな……あ、あれ？もしかしてピザ知らない……？」
「これが……ピザ……」
「そ、そうそうこの丸いやつ。切れ目がついてるから1枚でも分けて食べられるぞ――あ、あれこの寸劇いつまで続くんだ……？」
「ピザは、丸い……ピザは、分ける……ピザは……おいしい？」
「まぁ、写真見るからにおいしそうだわな。……これ、何かの真似？」
「うん。やってみたかった」
「なんだか、俺もその真似みたいなのをやったことがあるようなデジャブが……えと、これ食えるか？」
「うん！食べたい。分け分けしよう」
「分け、分け……？」

「ちょっ！からかわないで！」
「『ちょこちょこ』を思い出した……あっ」
「こんどは八幡くんが自爆したね」
「……ととりあえず頼むぞ。何がいい？」
「なーんでもっ」
「困るやつだ……でも、あ、あのさ、ピザ食おうとかいっときながら、俺、トマト苦手でさ……チーズメインのでいいか？このクアトロフォルマッジってやつ、ほぼチーズだけど……」
「ぜんぜんオッケーだよ。……あれ？ミラノ風ドリアのミートソースって、トマト使ってなかったっけ？」
「あのミートソースはあんまりトマト感ないからなぁ……もちろん、結衣がつくってくれたやつも――それでいいなら頼むか。注文してから窯で焼くらしいから、ちょっと待つぞ」

＊　＊　＊

「これが……ピザ……」
「そうだ、分け分けするやつだ」
「……冷めないうちに食べよっか」

「意図的にそらしたな……じゃあ、先取って」
「うん！――おお、流石伸びる伸びる。これおいしいやつだ」
「じゃあ俺も――思ったよりめっちゃチーズだな。というよりチーズしかない。たしかにこれはおいしいやつだ……そんじゃ、いただきます」
「いただきます」
「ん！こ、これは……！――」

⑳

「――あ、甘くてうまい！まるで……なにも思い浮かばん！」
「んんっ！――わ、笑わせないでよ。チーズこぼしそうになった……うん、チーズも生地もアツアツでおいしいね。薄めの生地だから食べやすいし、それに……ハチミツがかかってるんだ、すごいチーズに合ってる」
「アツ――」
「それもう禁止ね」
「嫌われたくないからやめとく――うん、ほんとうまい。クアトロだから、四種類のチーズをブレンドしてるんだよな。まさかハチミツがここまでチーズに合うとは思わなかった」
「クアトロでデュエマを思い出したよ」
「まさかデュエマまで履修済みとは恐れ入った……」
「まぁほとんどやったことないけどね……あ、八幡くんはともだちいなかったから云々のネタも禁止ねっ」
「先回りされるとは……」

「絶賛『比企谷八幡学』を履修中ですから」
「……残りも食べるか」
＊　＊　＊
「……こうしてさ」
「ん？」
「誰かとピザを食うの……ずっと夢だったんだ……」
「……いやそれは死亡フラグだよ」
「この場合何で死ぬんだ？」
「いや死なないで死なないで。まだまだ八幡くんには生きてもらいます。いっしょにやってみたいことたくさんあるし」
「……冗談だよ――そうな。まだ俺は死ねない――少なくともいつか死ぬまでは……」
「……よくわからないのと、あとそれも死亡フラグじゃない？」
「たしかに」
「まあ、いつか死ぬまでは死ねないね。その通りだ」
＊　＊　＊
「いやぁ、案外サクッと食べられたな」
「ね！おいしかった！ありがと連れてってくれて」

「ん。まぁ、学生生活というモラトリアム期間中くらい、こうやってともだちと外で食べる飯もいいもんだ」
「いいもんだね」
「外メシ効果ってやつかな？ピザ自体も十分うまいけど、なんか追加で美味魔法的なのがかけられてる気がする」
「美味魔法って楽しい言い回しだね」
「ラノベの影響だろうか……」
「でも八幡くんのラノベの設定って――」
「まってごめんやめてください……」
「わかったよ、ふふっ」
「心臓に悪い……――ん、そろそろ暗くなってきたな。話を切るようで申し訳ないが、真っ暗になる前に、解散しますか」
「うん……きょうもありがとね。いつもみたいに話すだけなのに、楽しくて嬉しいや」
「……おう。……俺もうれしいたのしいぞ」
「？なんか語呂いいねそれ」
「あー……いや、なんでもない。そうだな、語呂はいいな」
「？」

＊　＊　＊

「送らなくて平気か？」
「大丈夫だよ。コーヒーとケーキとピザ、おいしかったね」
「羅列するとめっちゃ食べたな、きょう」
「ふふっ、そうだね。……じゃあ――また」
「ああ、またな」

☒

「おっす、八幡くん」
「おう。おっす、結衣」
「本日はカジュアルな挨拶を試みました」
「その挨拶の次に出たことばがカジュアルじゃなくてフォーマル寄りなんだよなぁ……」
「ふふっ、かもしれないね――待った、かな？」
「いんや、ぜんぜん」
「わたし、けっこう早めに来たはずなんだけど、八幡くん、いつから待ってくれてるの？」
「毎日同じ時間からここで待ってるよ」
「え？……えっ！」
「くくっ、冗談冗談――この前あげた本に挟んでる栞に集合時間を書いてあったはずなんだが」
「そ、そうだったの？ごめん！すぐ確認してくる！……って本をもらった記憶ないんだけど……？」

「カジュアルなノリツッコミの誘発を試ませてみました」
「はめられた……八幡君、冗談もたくさん言ってくれるようになったね。もっともっと打ち解けてきていてうれしいな」
「まあ、なんだかんだで長い付き合いだしな……あと、実はさっきのは半分冗談だな」
「半分本当ってことは、毎日このカフェにいるってこと……？」
「い、いや、二人のときしかここには来ないから――ほれ、これ良かったら」
「え……これ、ラノベ？あ、タイトルは知ってる。すごい有名だよね？アニメも昔流行ってたらしいし」
「うむ。さっきの冗談が半分本当ってのは、本を結衣に渡したいのと、その冗談の元ネタがこの本にあるってことだな」
「なるほど……――ほんとにもらっていいの？」
「ああ。布教のためってのもないことはないが、結衣にはお世話になってるし、いままでコーヒーにクッキー、それにミラノ風ドリアまでご馳走になってるから、ぜんぜん恩を返しきれてないけど、せめてなにかお返ししたいと思ってな」
「――八幡くん、ありがとう！ちゃんと読むね！」
「おう。まあ、結衣がこの前言ったように、どんな作品も自分がおもしろいと思えばそれでいいから、すきなように使ってくれ」

「そうだけど、八幡くんからもらったことに意味があって――その時点で、なんというか、この本は『名作』だよ」
「……そうか、ありがとな」
「えへへっ。読むのがたのしみだなぁ」
「喜んでもらえてよかったよ――なにか頼むか？」
「あ、そうだね。えっと、きょうはどうしようかな――」

＊　＊　＊

「くぁぁ……」
「八幡くん、疲れてるの？大丈夫？」
「ああ、すまん。大丈夫だ。ひとまえであくびなんて失礼だよな、ごめん」
「そんな！ぜんぜん気にしないでっ。疲れてるときも隠してほしくないし、繰り返しになるけど、そっちの方が打ち解けられてると思うし、八幡くんの健康のためにも遠慮しないでほしいな」
「ありがとう……最近奉仕部がまた少し動き出しててな。別に忙しくなったわけではないんだが」
「そうなんだね。やっぱり八幡くんはえらいよ。ひとのためにそこまで行動できるなんて」

「……いや、そこまで俺はできた人間じゃないんだ。奉仕部だって自分の意思で入部したわけでもないし、人を助けることを純粋にできない自分が少し嫌いだ」
「でも……」
「……少し、俺の話をしてみるか――」

⊠

「……なんというかさ、『ひとを助ける』ってさ、ことばだけだと良い具合に聞こえるけど、実際はすごい恣意的で一方的な行動のように思えるんだよな」
「……どうして？」
「――ひとを助けるって、いわば、対象者の『運命』みたいなものを勝手に変えてしまうってことだろ？そして、実際に助けた瞬間、助けられたひとの、もしも助けられなかった場合のその後の展開一切合切を消してしまうんじゃないかって、そう思ってるんだ」
「でも、助けられなかった場合、そのひとはつらい目に遭うでしょ？」
「そうでもあるかもしれないが、裏を返して、よくよく考えてみると、そうじゃない場合もあるかもしれない。当該者はそのとき助からないだけで、時間が経てば、いい方向に進む場合もあるかもしれない。でも、その前のタイミングで俺が助けてしまったら、その方向性も消滅する。ひょっとすると、俺が助けたことで、その後良くない運命を辿らざるを得ない人間もいるかもしれない。そして、それを俺は恣意的にやってしまう」
「……うーん。どうなんだろう。でも、困っているひとが助けを求めているなら、やっぱり助けることが正しいことだと思うよ。その後、そのひとがどんな道を歩まざるを得な

いとしても、その『運命』までに責任を感じなくてもいいんじゃないかな」
「そう、なんだよな……でも、どうしてもこんな捻くれた考え方から抜け出せないんだ」
「わたしは八幡くんと出会えたことで、別に助けられたというつもりはないけど、すごいたのしい人生を送れているよ。わたしには八幡くんと出会わなかった場合のその後の人生のベクトルを実際には知ることができないし、実際に出会ったその後の長い『運命』もいまは想像できないよ。――でも、『八幡くんと出会ってからいままで』すごいたのしいんだ。それは八幡くんがしてくれたこと。これは、なんにも悪いことじゃない。わたしはとても八幡くんに感謝しているよ」
「……ありがとう。こんなことを最近考えてたから、少し寝不足だったんだ。――ほんとうにありがとう。うるっとしそうだ」
「どういたしましてっ。――人間って、助けるっていう行為以外にも他者にたくさんの影響を与えるから、少し辛口になっちゃうけど、一つ一つを考えていたらキリがないと思うよ。でも、わたしにしてくれたみたいに良い影響もいっぱいあるから、そのことはどうか誇ってね」
「……ああ、さんきゅな。――すごい重い話を切り出してしまっていたことを実感してきた。まって、恥ずかしい……その、すまんかった！」
「ううん、大丈夫だよ――そういった話をはじめて八幡くんから聴けて、正直、うれしい

な。だんだん、君のことがわかっていく」
「……結衣も、なんかあったらいつでも相談してくれ」
「うん、ありがとっ――」

☒

「――最近ね、コーヒーの新しい淹れ方を開拓したんだ」
「お湯の注ぎ方を変えたとか？」
「ううん――いや、それもあるかな。いままでやってきたのは紙のフィルターで淹れるペーパードリップってやり方だったんだけど、最近はネルドリップっていうのも試してるんだ」
「ネル？」
「ネルっていうのはフランネルの略で、織物の一種なんだけどね、それをドリッパーとして使って淹れるのがネルドリップのことなんだ」
「フランネルか、たしか服にも使われてるよな？」
「そうそう！それをコーヒーにも応用してるんだ」
「ペーパードリップとは味が変わったりするのか？」
「うん――なんというかね……正直に言うと、異次元の飲み物になる」
「い、異次元……」
「良い意味で、だよ。ペーパーももちろんおいしいけど、ネルで淹れたコーヒーは、すん

ごく重厚でオイリーなんだ。ネルはペーパーと違って生地の網目が大きいから、その分コーヒー豆の油分が濾過されずに通り抜けやすいんだ。ひとによって好みややり方は違うらしいけど、わたしが試してる方法では、ペーパーで淹れるときよりもかなり多めに豆を使うの。そうすると……とてもよろしくなります」

「よろしくなるのかぁ……オイリーなコーヒーってあんまり想像できないな」

「最大限オイリーにさせるためには、さっき八幡くんが言ってくれたように、お湯の注ぎ方も重要でね——点滴ドリップって言われる淹れ方が必要なの。普通挽いた豆にお湯を注ぐときは、まずはサッと注いで蒸らしたあと、円を描いて何回かに分けて注ぐんだけど、点滴ドリップは病院の点滴がポタッ、ポタッ、って垂れるように、お湯を一滴一滴、丁寧に注いでいくんだ」

「なんというか、すごい時間がかかりそうだな」

「そうなの！一滴ずつ注ぐのは結構集中力や忍耐力が必要だし、最初やったときはうまくできなかった。しかも、一杯分淹れるのにもネルの準備から淹れ終わるまで、ペーパーの五倍以上の時間はかかるかもしれない——まぁ、まだ慣れてないだけかもしれないけど」

「でも、よろしいくらいうまいわけだ」

「うん……ちょっとコーヒーの人生観変わったくらいには」

「……飲んでみたいな」
「えっ！ほんとっ！やったっ。やっぱりひとに――ともだちに飲んでもらって感想もらうのはとってもうれしいことだから」
「……うん。熱弁してくれてるし、すごい興味持ってきたわ」
「えへへ、少し恥ずかしい――ネルはこだわると際限がなくて、ネルは何度も使える分、本当にちゃんとするなら、淹れる前にネル本体を煮沸してからドリッパーとして使って、淹れ終わったあとも水につけながら冷蔵庫で保管、そして毎日その水を取り変えるみたいなことをしないといけなくて……」
「おぉ……でもコーヒーマニアの結衣なら案外こまめにできそうだな」
「いや、流石にちょっと面倒だなとは思うよ、あはは……でも、ペーパーとは違うコーヒーをつくるのは、手間がかかってもたのしいね、今度淹れるよ。――その……また、ウチ、来る？」
「んんっ！……あー、えっと、まぁ……そうな、結衣が嫌じゃなきゃ、またお邪魔するよ」
「うん！……次は気まずい空気にはならないと思うよ、多分……」
「ちょ、結衣！そこにはあえて触れなかったんだがなぁ……」
「……」
「……よし、とりあえず釣りについて、いまから計画練るか」

「そ、そうだね！この前メールで話したあたりから進めようかっ――」

☒

「――だいぶ全体の計画ができてきたね」
「……うん。もうちょっと練ったら、あとは行くだけなんだが……その前になぁ」
「？どうしたの？」
「小町経由と言いつつも、両親には連絡しないといけないから、ちょっとな……――その、異性のどころか友人自体一人もいなかった俺が、ほんとうのともだちと二人で出かけるって話したら、あれやこれや詰問されそうな予感しかしなくてな」
「な、なるほど……？」
「結衣はなんて言うつもりなんだ？親御さんに」
「私はもう電話で伝えたよ」
「……え？」
「いやぁ、たのしみすぎてね、フライング気味に友達と釣りに行く予定なんだぁってお母さんに先に話しちゃった」
「……そそそうか、なるほどなぁ……『ともだち』と行くって伝えただけだもんな――うん、大丈夫、なにも問題がないな」

「仲の良い『異性のともだち』と計画練って行くんだって話したよ」
「……ほ、ほほう。なるほどなぁ……お、親御さんはそれでなんておっしゃってまし……？」
「前々から八幡くんの話は電話でよくしてたから、その、うん……オールオッケーだって。たのしんできてって」
「あっうん。さ、さいですか……なるほどなぁ……」
「は、八幡くん。さっきから『なるほどなぁ……』って連呼してるように思えるけど……」
「……すまん、ちょっと疲れてるのかもしれん。なんかあたまがフワフワする……」
「あ、そっそうだよね。八幡くん寝不足なわけだし――ほんとごめんっ！そんなときにいろいろ喋らせちゃって！気が利かなくてごめんね……」
「い、いや、違うんだ。なんだかよくわからない感情が入り混じって、不思議な気持ちで、眠いだけなんだ。つまり眠い、うん。問題がない」
「八幡くん……きょうはおうちで休も？やっぱり疲れてると思うよ……」
「……かもな。いろいろと、こころの内を暴露して話を聞いてもらったり、なにやら結衣の親御さんに俺の存在が……いや、なんでもないんだ。――そうだな、結衣。きょうはごめん。ちょい家に帰って寝てあたまを休めるわ」
「うん……ごめんね、ほんとに」

「結衣はなんにも悪くない。……その、結衣が俺に言ってくれたことと同じように、結衣と出会ってから、結衣は俺に良い影響をたくさん与えつづけてくれている。だから――ありがとう」
「えっ……」
「まだあたまがクラクラする……じゃあ、会計して解散するか。すまんな、きょうは」
「う、ううん――その、送らなくて大丈夫？」
「ああ」

＊　＊　＊

「お大事にね……八幡くん」
「おう、せんきゅ。帰ったらすぐ風呂入って寝るわ」
「うん……」
「次いつ会うかとか、釣りの細部の計画とかは、また連絡して決めよう――寝不足は俺のせいだし……その、寝不足だけではない理由みたいなのがありそうでな……まあ、ぜんぶ俺の過失だ。結衣が呵責を感じなくていい。だから……また会おう」
「……うんっ！またね！気をつけて！」

☒

「……ようこそ！いらっしゃいませ――！」
「ど、どうも……」
「一名様ですか？靴を脱いでおすきな席へどうぞっ」
「はい……お、お邪魔します」
「どうぞどうぞ――ふふっ、ひさしぶりだね、八幡くん」
「くくっ。ああ、そうだな。ひさしぶり、結衣――その、この前はすまなかった。……もう大丈夫だ。最近はよく眠れてるから」
「よかった……ほんと、ごめんね」
「結衣はなんも悪くないから気にするな。むしろ、悩んでることを聞いてもらってよかったよ。おかげで元気だ」
「うんっ。ささ、上がって上がって。さっそくだけど、コーヒー淹れるね」
「おう。……まだ二回目なのに、思ったより自然に異性の部屋に入れてる自分がなんか怖いな――」

＊　＊　＊

「淹れてるところを見たい、か……」
「あ、すまん。だめだったか……？」
「ううん、違うの。ただ緊張するなぁって――よし。ネルドリップ、いっちょやってみますっ」
「どんな感じでコーヒーつくるのか、たのしみだ」

＊　＊　＊

「時短と、なるべくコーヒーを冷ませないために、同時並行で進めていくよ――まずは小鍋でお湯を沸かします。それで、沸騰するまでにコーヒー豆をミルで挽くよ。どの量をどう挽くかは本当にまちまちだけど、わたしの好みでは一二〇ミリリットルに対して豆が二〇グラム。おそらくすごい多い方だと思う。挽き目は粗めがオーソドックスらしいから、このミルのダイヤルでいうと五番かな」
「すごい本格的な電動ミルだな……」
「長い趣味になりそうだと実感したから、少しずつミルのレベルを上げるよりかは、最初からちょっと良いのを買った方が結果的に安上がりかなぁって思ってね」
「たしかにその通りだな」
「うん――よし、挽けたね。次はネルの煮沸です」
「これがネルなのか。なんというか、クリーミー？な色をしてるな」

「そうだね。最初は白に近い色をしてるフィルターが多いけど、何度も使ううちにコーヒー豆の色と混じってこういった色になるね」

＊　＊　＊

「よし、お湯も準備オッケーだ。このミルを沸騰した小鍋に入れて、少し煮ていくよ」
「なんで煮沸するんだっけ？」
「ネルフィルターは再利用できる分、使えば使うほどコーヒーの豆が繊維に詰まっちゃうんだよね。だから、そういったいわゆる目詰まりを取り除くために、毎回煮沸するのがベストみたい。まぁ、かなり面倒くさいから、しないひともいるみたいだけど」
「たしかに、面倒だな」
「そして、煮沸が終わるタイミングに合わせて、カップとかを温めるためと、コーヒーに注ぐためのお湯を電気ケトルで沸かすよ」
「ん？ここにドリップ用のケトルがあるよな？これで直接沸かさないのか？」
「そのポッドは銅製なんだけど、そのまま沸かしちゃうと焦げついて黒くなっちゃうのと、熱が通りやすいから取手まですごく熱くなっちゃうんだよね。だから、電気ケトルで沸かせたお湯を後からドリップポッドに入れるのがベターかな。あと、なんで電気ケトル自体でコーヒーを淹れないのかはいろいろ理由があるけど、やっぱりドリップ専用のポッドで淹れるのがいちばんだからだね」

＊　＊　＊

「五分経ったかな。……それじゃあ、熱いからネルを箸で鍋から取り出してから、流水で冷ますよ――そして、手で持てるようになったら、絞って水気を切ります。……で、電気ケトルで沸騰させた量多めのお湯をドリップ用のポッドと、目盛りのついたコーヒーサーバーに注ぎます」

「サーバーって、このビーカーみたいなやつだな――それにしても、かなり忙しなくなるな……」

「うん――そしてサーバーが温まり終わったら、お湯をそのままカップに移して、今度はカップを温めるよ。カップ自体が大体一二〇ミリリットル分だから、そのままドリッパーから淹れてもいいんだけど、口が小さいからはみ出ちゃうこともあるので、サーバーに淹れてから移すことにしてます」

「……見てるからなんとなくわかるけど、なんだかこんがらがりそうだ……」

「まだ淹れる前の段階でこれだからね、あはは……それじゃあ、どんどん進めていくよ――」

☒

「――よし、次に水気を切ってあるネルを手で持ちながら淹れられるように、ハンドルに装着します」
「ハンドルが通せるようにネル自体に穴が最初からついてるんだな」
「そうそう――装着完了。そして、挽いた粉をネルに入れてっと。……お湯の方はこのあいだにちょうどいい具合に熱湯からは冷めてると思う。温度も人によって好みがまちまちだね。だいたい八五度から九五度までの間におさまればいいかな。これからする淹れ方は点滴ドリップだから時間がかかるし、お湯もだんだん冷めてくるから、あえて最初は温度高めにしておいた方がいいと自分では思ってるよ」
「もはや化学実験の領域だ……」
「たしかに、コーヒーは化学と言っても差し支えないような気がするね――そして、やっとこれで淹れる段階まで来たよ……」
「おおっ、待ってました！」
「うんっ。不肖船見結衣、がんばりますっ！――えっと、サーバーにネルドリッパーをセットして淹れることもできるけど、ドリッパーを固定してポッドを動かすよりも、

ポッドを固定してドリッパーを動かした方がドリップが安定するので、わたしは後者の方法で淹れます」
「アニメのキャラだと目がグルグルになって怯むような説明だな……」
「あはは……まぁ、淹れてみたら分かってくると思うよ――よし。では、お湯を注いでいきます」
「……」
「……」
「……」
「……」
「べ、別に気を遣って沈黙しなくてもいいんだよ……？」
「い、いや。見てる限りめっちゃ集中力が必要だと思うからな……しかし、すごいな。本当に一滴一滴、点滴みたいにお湯が落ちてるな」
「練習しまくったからね。ほんとはペリカン口のポッド――後で写真で見せるけどね、そういう注ぎ口のタイプのポッドの方が点滴ドリップをしやすいんだけど、私は先にこれを買っちゃったから……これでも淹れられることはできるけどね」
「なるほど……」
「……」

「……」
「……見てたら分かると思うけど、この淹れ方、百二十ミリリットル注ぐのにもひっじょーっ！に時間がかかりますので……その……何か話してくれると助かります」
「お、おう……じゃあ、俺の過去の苦い経験談でもどうだ……コーヒーだけに」
「……」
「……結局気まずくなってしまった……」
「あっ、違うのっ！ごめんねっ！なんて返せばいいか考えててっ」
「大丈夫だ。大丈夫なんだ。大丈夫すぎるんだ……」
「そんな三段活用みたいに……」
「まずい恥ずかしいしにたい」
「待って早まらないでっ！これっ！これ淹れて飲んだらきっと希望は見えるから！——」

☒

「――あと、少し……」
「……」
「……」
「……その、八幡くんのコーヒー的経験談紹介コーナーはしないの？」
「勘弁してください……」
「じょ、冗談だからっ！――えっと、一〇〇ミリの目盛りを少し超えたくらい、これで大体一二〇ミリリットルだね……よし、ドリッパーをとりあえず脇に置いて、温めていたカップのお湯を捨ててサーバーからカップに移すよ」
「ついに……」
「そしてスプーンで軽く混ぜてっと……――完、成っ！」
「おおっ！……ほんとうにおつかれさまだな。たしかにこりゃ手間がかかる」
「うんっ。でも、その分おいしいと思うよ」
「そうだな……って、ん？一二〇ミリで一杯分だよな？結衣の分は？」
「いや、わたしはいいよ。また今度自分で淹れるから。二杯分だとドリップも二倍近く

時間がかかってしまうので。はやく八幡くんに飲んでもらいたかったし」
「いや、しかしな……やっぱりこういう時は二人でいっしょに飲みたいけどな」
「んんっ！――えっと……その……」
「結衣の分もいまから淹れたらどうだ？あ、いや、手間がかかるだろうからなぁ。――これを二人で分けるか」
「！あっ、じゃあさき八幡くんが飲んでっ。その後わたしがそのカップもらうからっ」
「えっ！……えっとだな。その、結衣。別のカップがあるなら飲む前に半分で割ろうって話で……だな……」
「あっ……」
「……」
「……た、棚から別のカップ取ってくり……くる……ね……」
「お、おう……」
「しにたい」
「ま、待て結衣っ！早まるな！これ飲んだら希望が見えるんだろっ！――」

＊　＊　＊

「なにもなかったね」
「そうだな。結衣がコーヒーを淹れてくれた。それ以外にはなんにもなかった」

「よ、よしっ。――それでは、一人六〇ミリリットルと大変少量ですが、いただきますか」
「おう――それでは、いただきます」
「……どうかな？」
「……！――えっ、なんだこれ……すげぇ。コーヒーだけど、いままで飲んできたのとはまったく違う。めちゃくちゃトロッとしてて濃い。なおかつ味が重層的というか……ほんとに次元が別な感じがする。うまい、ほんとうに」
「よかった……ここまで濃いと嫌厭するひともいるみたいだから、おいしいと思ってくれてるのならよかったよ」
「濃いけど雑味みたいなのはあまり感じないな」
「挽き目を細かくしすぎるとイガイガな味まで抽出されてしまうけど、粗めでゆっくり淹れてるからかな。あと、申し訳ないけど、やっぱり淹れるのにどうしても時間がかかるから、すごい温いと思う。淹れた後温め直すこともできるけど、わたしはあまりそれをしたくなくてね。温めてしまうと熱で風味が飛びやすくなるって理由もあるけど」
「いや。たしかに温いかもしれんが、むしろ味を感じやすくていいと思う。――まじでうまい。こんな味のコーヒーがあったとは……」
「喜んでもらえてよかったよっ。手間がかかるから毎朝学校に行く前に淹れるってことは難しいけど、こうやって余裕のあるときにじっくり淹れて飲むのはやっぱりたのしい

よ。――二人で飲むともっとね」

「……ああ、そうだな――」

「……」
「……」
「……なんだか、まったりモードだね」
「おう、そうだな……」
「あ、ずっとあぐらも疲れるだろうから、足伸ばしてもらってもいいよ。もっとくつろいでね」
「すまんな、助かる……」
「うん……ふぅ。コーヒー、おいしいや。手前ミソかもだけど」
「いや、ほんとにうまいぞ、もう飲みきっちまった」
「あ、わたしもちょうどいまぜんぶ飲んじゃった……も一杯淹れようか？」
「また手間をかけさせたくないから大丈夫だ……」
「わかった、ありがとね」
「おう、こちらこそ……」
「……」

「……」
「……ふふっ」
「ん？どうした」
「いや、なんかね、気まずくならずにお互いが黙ってるのってなんだか新鮮だなぁって思ってさ――ほら、出会ってからいままでの私たち、なんだかんだで結構話し合ってたでしょ？最初の頃は話題が見つからなくて気まずく黙り込んでたこともあったけど、いまは話さなくても落ち着いていられるというか……」
「……たしかに。昔より気軽に話せるようになったし、いまみたいに自然にまったりできてるよな」
「……普通の『ともだち』関係より仲良くなったのかな？」
「ぶっ！」
「……え、あっ、いやっ！そ、そういう意味じゃなくてねっ！……そ、その……し、親友みたいだなって！異性同士にしては結構仲良いと思うんだよっ、わたしたちっ。頻繁に会ったりしてるわけだからさ！」
「お、おう。そうだな……――よく考えたら、異性同士がここまで頻りに会うのは、な、仲が良いとはいえ、よくないかもしれんな……結衣にも迷惑かけてるよな……」
「そ、そんなことないっ！ほんとにっ！これはほんとうっ！――そ、その、わたしは八幡

の――八幡くんのこと親友だと思ってるからっ！わたしは会いたいと思って会ってるからっ、きょうだって！……だから……――どうか、わたしを信じて」
「……わかった、ありがとう。そうだな、仲が良いことはなにも悪いことじゃないな。――……それに、初の友人が親友というのも、とても良いもんだ」
「……うん」
「……あとさ、俺のことは『八幡』で良い。いや、むしろそう呼んでくれ」
「……良いの？」
「仲が良いことは悪いことじゃないんだから、もっと仲良くなったっていいだろうさ。……なんか恥ずかしいセリフ言ってる気がする……」
「……ありがとっ、『八幡』っ。その……これからも……よ、よろしく？」
「お、おう……よろしく？」
「……ふふっ」
「……くくっ」
「……なにかがとても良くなった気がしますので……――とりあえず、またまったりしますか」
「おう。またまったりしますか――」

⊠

「……そういえば」
「ん？」
「釣りももちろんそうだけど、今度、また映画、観に行かないか」
「おっ！いいねっ！行こう行こう」
「この前のところでもいいし、調べてみるとまだミニシアターはところどころにあるみたいだな。どこも結構遠いけどな」
「そうだね。この前の映画館がここからいちばん近かったかな。――でも、違うところもできれば行ってみたいよね。急ぎすぎる必要はないけど、今後もそういった単館の映画館が存続するかどうかはわからないから、応援するためにもいろいろ行ってみたいかな。行くにも観るにもお金も結構かかるから、映画館で映画を観るのはすごい贅沢なことだけどね」
「たしかに贅沢なことだよな。昔のひとはもっと気軽に観られていたはずなのに――いずれにせよ、まだ一回しか行ってないけど、ミニシアターが良いところってのはよくわかったから、他のところにも行ってみたいと思う。調べて観に行くか」

「やったっ。……映画自体がおもしろいものだし、多少お金がかかっても、暗闇で誰かと共有しながら映像を観るのは、不思議ととってもたのしいからね」
「……そうだな。映画館だけで経験できる暗闇の娯楽だ」

＊　＊　＊

「映画といえば、結衣は最近なにか観たか？」
「前に言った、よく観る映画の年代までは古くないんだけど……『ニュー・シネマ・パラダイス』って映画を観たよ」
「……聞いたことあるな」
「おっ、うれしいな。イタリアの映画なんだけどね、たくさんの映画賞を取った名作と呼ばれる映画なんだよ。八〇年代の映画だね」
「十分古いんだが……」
「あはは……でもね、いまでもときたま上映されているらしくてね、それくらい評価の高い映画なんだ」
「それこそミニシアターでいまやってたら観に行きたいな」
「ねっ！あとで調べてみるよ。……配信サービスでたくさん観てるけど、やっぱり映画館でみたいよね。高校生になったら、バイトして映画館に通ってみたいなぁ」
「いいな。しかし、随分と入れ込んでるんだな。もちろん非難しているわけではなくて、

趣味に良い意味で没頭してるなと思ってな」
「うんっ。——映画の良いところって、飽きる可能性がほとんどないってことなんだよね。映画って、一人の人間が何回人生を繰り返してもすべて観られないくらい膨大な数があって、それでも同じ内容の映画なんてなに一つないわけだから、ある映画に飽きたとしても、まだまだ観てないおもしろい映画はたくさんある。だから、『映画』それ自体に飽きることってあまりないと思うんだ。そして、なにより映画は『たのしい』」
「……すごいな、結衣は」
「たまたま良い趣味に出会えただけだよ。……それに、八幡は趣味と言えるものがないって昔に言ってたけど、趣味って好きなことや興味のあることの延長線上にあるものだと思うから、本がすきならそれは趣味と言っていいし、興味が少しでもあるものは趣味になりうると思うんだ」
「……その通りだ。本も好きだし、結衣のおかげで最近は映画の良さにも気づいて、前より観るようになったから、興味を持てるものが増えた」
「良かったよ。また映画、観てくれてたんだね。最近はなにを観たの？」
「その、結衣が前に言ってたような、二〇世紀初めくらいの映画を観たんだが……」
「えっ！なに観たのっ！」
「お、おう。えっとだな——」

☒

「――『カリガリ博士』って映画なんだが……知ってるか？」
「えっ！わたしもこの前観たよっ！すごい偶然だっ」
「おお、流石結衣だな……同じのを観ていて良かった。俺が観たバージョンはＢＧＭが付いてたけど、この作品は元々は音がない映画――サイレント映画ってやつだよな？」
「そう。無声映画、サイレント映画だね。一九二〇年代後半までは、映像と音を同時に撮る技術が確立してなかったから、昔の映画は音が流れなかったんだよね。それ以降は、音と映像がシンクロできるトーキー映画が主流になるわけだけど――八幡は配信サービスで観たの？」
「ああ。多分結衣と同じやつだな」
「わたしと八幡が使ってるような配信サービスで提供されてるサイレント映画は、大抵はサウンド版、つまり後付けでＢＧＭを収録したバージョンなんだ。一度、まったく音がない状態の映画を配信サービスや劇場で観てみたいなぁ――いずれにせよ、サウンド版でも俳優の声は聞こえないわけだけど、八幡はどうだったかな？」
「そうだな……はじめてサイレント映画を観たから、とにかく新鮮だったな。画面いっ

ぱいに映る字幕も初体験で面白かった」
「うんうん。俳優が少し口を動かすとつづけざまにセリフが大きく映るのはなかなか興味深いよね――いっしょの映画を観たのがうれしくていろいろ訊いちゃうけど、映画自体はどうだった?」
「おう。無声で字幕も毎回映るわけじゃないのに、ちゃんとストーリーがわかるようにできていたな。そう言えば、俳優の演技もオーバーだった気がする」
「やっぱり音がない分ストーリーがわかりづらくなるから、字幕以外の要素も明瞭にしないといけなかったっていう背景があるみたい。だから、役者の演技もあえて過剰にしているんだね。ヒロインが恐怖する演技もすごいオーバーじゃなかったかな?」
「たしかに。ホラー漫画みたいな顔をしてたな」
「あの映画に限れば、全体が結構演劇に近い感じだったよね。……サイレントと言えば、海外だと当時は無声映画は無声のままか、伴奏やレコードで音楽を流して上映してたわけだけど、昔の日本でサイレント映画を上映するときは、『弁士』っていう映画の語り手が活躍してたみたいなんだ」
「弁士?」
「『活動弁士』とか『活弁』とも呼ばれてるんだけどね、日本ではサイレント映画の上映時に、その場で映画の俳優のセリフを代わりに読んだり、状況や背景をナレーションし

てくれるひとがいたんだ。いまの声優さんみたいな役割だね」
「そんな文化があったのか、知らなかった……すごいおもしろそうだな」
「配信サービスでも活弁付きの映画はちらほらあるから、今度良かったら観てみてよ。……それに、現在でも弁士は少ないけど活動しているみたい」
「そうなのか……でも、多分サイレント映画を流す映画館ってほとんどないよな？」
「うん。それこそ単館の映画館とかでしか流してくれないよね。活弁付きで映画を観て育った人たちはいまではもうほとんどいないと思うけど、伝統を絶やさないように、数は少なくても弁士がそういった映画館や施設で活動しているみたい」
「聴いていると、それもいつか結衣といっしょに観に行きたくなってきたな」
「！……うんっ。やってみたいことがたくさん増えてきたね」
「そうだな。……お金もかかるから、すぐにすべてができるわけではないが、『いつかやってみたいこと』が増えるのは結構たのしいことなのかもしれん」
「……そうだね。たのしみが溜まっていくのはワクワクするよね。宿題が溜まるのとは違って」
「……この会話のオチができたな」
「やめてっ、恥ずかしいっ……！——」

☒

「結局、まったりできずに話し込んじゃったね。ごめん……」
「自然にまったりするのがいいわけだから、自然と話し込むのも悪いことじゃないと思うぞ。それに……たのしいからな、結衣との会話は」
「……照れるね」
「お、おう……」
「……」
「……」
「……これは、『自然な』沈黙なのかな……？」
「い、いや……どうだろうな……」

＊　＊　＊

「……いつか言おうとは思ってたけどさ――八幡ってやさしいよね」
「んんっ。ど、どした急に」
「いや、よいしょとかそういうつもりではないんだけど、ずっと思ってたからさ」
「なぜその年齢で『よいしょ』を知っているんだ……」

「え、映画の影響かな？……それこそ映画の俳優みたいなやさしさがあるよね、八幡は。それも、性格もキリッとした男前俳優と、少し道化っぽいけどこころが純粋な俳優を組み合わせたような……別にこっちを喜ばせようみたいなわかりやすい意図を見せているわけじゃないのに、話をちゃんと聞いてくれる、二種類の俳優のいいとこ取り……みたいな？……あっ、ご、ごめんっ！なにかすごい失礼なことを言ってるよねっ」

「……むしろすげぇうれしいな。そこまでちゃんと考えてくれて。ここまで深く褒められたことないから、結構感動してる……」

「そ、そこまで……？」

「ああ……――いまではもう、嫌われつづけてきた人生だったとは思っていないが、それでも『ひとに認められる』って経験がほとんどなかったからな……うれしい、ほんと」

「その……認める認めない以前に、わたしは八幡を自然に受け入れられてるから。もし『ともだち』の定義があるとするなら、それは『定義がなくてもともだちになれること』だとわたしは思ってるよ。認めるかどうかを超えて、八幡とありのままでこれからも接したいな」

「……グッときた。そのとおりだな。……そんで、いまのめちゃくちゃいいセリフだった。銀幕女優だったぞ、結衣」

「は、恥ずかしい……！自分でもだいぶキザだと思ったから……！」

「いや、ほんとに良い画だったと思うぞ。……この前俺にラノベを書くことをすすめてくれただろ？そのだな……結衣は演技には興味ないのか？」
「えっ……考えたことなかったな。いや、なってみたいなとは軽く思ったことがあるけど、夢としては考えたことがないかも……」
「別に夢までの話ではなくても、映画がすきなら演技も経験してみるのもおもしろいんじゃないかと思ってな……すまん、俺の勝手な提案だ。無視してくれ」
「そ、そんなことないよっ。……逆になんで思いつかなかったんだろうと考えていてね。こころのどこかでためらってたのかもしれない。……たしかに、たのしそうだと思う。演技についてほとんど知識がないから、もっと調べなきゃだけど、興味はすごいある。……ありがとう、八幡」
「おう。それに、自分でつくってみるのも一興じゃないか？自主制作ってやつだな」
「！良いっ！すごい良いねっ！……そうだっ！――いっしょにつくろうよ！」
「えっ……？」
「別にいますぐにってわけじゃないよ。それに、わたしたちの他に、もっと人数が必要でもあると思うから。……でも、知恵を出し合いながら準備をして映画をつくるってすごいおもしろそう！……それで、八幡とわたしも演技するのっ！」
「お、俺もか？」

「うんっ、もちろん！」
「……」
「……だ、だめかな？」
「……正直、結衣にすすめたときから、こういう話になるんじゃないかとは心中思っていた。昔の俺なら断っていただろうが、結衣と出会ってから、いろんな面で穿った見方をすることがなくなってきたからな――だから……そうだな、やってみるか」
「！……ありがとうっ！八幡！」
「まあ、モラトリアムはまだあるからな。ゆっくりやってこう」
「うんっ！」
「俺も映画の世界を広げていきたい。……そういやさっき言ってくれた、俺の性格を構成する二種類の俳優って、特にモデルとしている俳優がいるのか？」
「い、いるんだけど……それを言うのは、ちょっと恥ずかしいかも」
「お、おう、そうか。無理には言わせるつもりはないが……」
「……いつかかならず言うよ」
「……わかった」

⊠

「……ほんとはな」
「？うん」
「……こうしてずっと過ごしていたいんだ」
「！えっ、それって……」
「い、いや！深い意味はなくてだな……その、俺も受験を考えなくちゃいけない時期なんだが……もちろん受験はがんばるだろうが、あまりその以降の将来について考えられなくてな。大学入って就職して、キャリアを積んで……みたいなプロセスがまったく想像できん。だから、こうしてただすきなことを話して過ごしていたいなって思ってな」
「な、なるほどね……――私も高校受験をしなきゃいけないけど、高校でどうするかも考えてないから、ましてや大学受験なんてって感じだね……もちろん大学のことも考えたら、良い高校に入らないとって思うけどね」
「俺たちって、いつのまにか社会的なルートを歩まなくちゃいけなくなってるよな。高校を受験して、大学を受験して、大抵の場合企業に就職して……みたいな感じで、自分のやりたいことや考えが確立する前に――いや、仮に確立していても、この競争社会か

ら逃れられないようになっているというか……」
「たしかに。受験戦争もそうだけど、わたしたちがそうしたくないと思う前に、すでに社会人になるまでのルートを進まなくちゃいけないようになっていて、その事実に気づいた頃には『やめます』なんてもう言えない状態になってるわけだよね」
「人間ってのは、ほんとうに社会からは逃げられないよな。俺はずっと『働きたくない！』と知り合いに豪語してきて、ある意味そのことに自信を持っていたけど、仮に働かなくても社会には属さないといけない。社会のなかにいる限りは『ちゃんと生きる』ことを直接的であれ間接的であれ強制されるから、働かない状態でも感覚が麻痺していなければ普通は生きづらさを感じるよな。別に正論だとは思わんが、働かないことだってそれで生きていけるなら人生の選択肢の一つだと思う。だが、社会に属している感覚がある限り、どうしても向こうからの圧力を無視して生きられない。学生ですら『しっかり生きろ』って無言の圧をずっとかけられているからな」
「なるほど……こんなこと言ったら八幡は嫌かもだけど、わたしはまだ中学生だから、社会からは逃れられないとは実感していても、それを無視して過ごせるくらいには現実味がない話になっちゃうな……」
「いや、まったく嫌だとは思わないし、むしろその年齢なら考えるべきではないと思う。『若いうちに遊んで学ぶべきだ』みたいなコメンテーター的意見を言うつもりはさらさ

らないが、それでも中学生なら将来のことはあまり考えなくていいんじゃないか。俺はこの高校にいるけど、それは中学のころ会いたくないやつらがいたからやむなく勉強しただけだからな」

「それでも、やっぱり受験勉強はがんばらなくちゃいけないし、それこそ社会的な圧から『がんばらざるをえない』状況になりそうだよね」

「そうだな……でも、こうして『親友』とすきなことを話してすきなことを共にするのはいちばんの安らぎだわ……恥ずかしいこと言ってる自覚はあるが」

「……ありがとっ」

「……おう。――ヘンな話、これ以上年を重ねたくないとは思う」

「わたしも同感。ずっとこのままがいいね――」

＊　＊　＊

「話してたら結構暗くなったな――長居してしまってすまない」

「ううんっ。すっごいたのしかった。その……また、来てくれる？」

「おう……もちろん。コーヒーもまた飲みたいからな。――次は、時間がかかって申し訳ないけど、二人分のコーヒーを淹れてもらっていっしょに飲もう」

「……忘れてたこと思い出しちゃった」

「……次は一つのカップで飲むか？」

「っ！……は、は、八幡っ！からかわないでよっ！――」

＊　＊　＊

「――きょうもありがとう」

「……最後に八幡がわたしをからかった……」

「わ、悪かったって……釣りはまだ練らないといけないことが結構あるから、メールでまた連絡し合うのと、時間がかかるなら、先にやってみたいことをやるのもいいな」

「……そうだね。社会は依然と存在するけど、わたしたちにはまだまだ時間があるから、余裕のあるうちにいろいろやってみたいね」

「親交が続けば、社会人になったあとも、こ、こうして会って話したり出かけたりしたいけど……な……うん……」

「あれ、自分のセリフに照れてる？八幡」

「か、からかい返すな……」

「ふふっ。――　もちろん、これからもその先も、いっしょにおしゃべりして、いろんなことをしよう」

「……おう」

「……それじゃ、ね」

「ああ、また」

☒

「……着いた」
「……着いたね」
「……まさか『ニュー・シネマ・パラダイス』がほんとに上映中だったとは……」
「わたしもびっくりした。探してみるもんだね」
「俺では探せなかったから、ありがとな。――前よりは少し遠いシネマだけど、ここはビルの上の階にあるんだな」
「ミニシアターもいろんな形があるんだね。――それにしても、朝早くに集まってもらってごめんね。きょうの朝で終映だから、急いで決めて来てもらったんだけど……」
「いや、むしろこっちがありがとうと言いたい。結衣は二回目だろ?それこそ良かったのか?」
「おもしろい映画は何度観ても飽きないよ。いまみたいに入れ替え制じゃなかった時代は、一本か二本かの映画が一日中流れるから、ずっと観続けて内容を覚えきってくるひともいたらしいしね」
「それはすごいな……――じゃ、さっそく入ってみるか」

「うんっ」

＊　＊　＊

「おお……うまくことばでは言い表せないけど、良い雰囲気だな、ここ」
「ね！映画がすきなひとが集まりそうな感じがする。前のところも良かったけど、ここはよりオシャレだね」
「パンフレットも机の上にずらっと置いてあるんだな」
「あ！この映画観たかったんだよね！来月上映されるのかぁ。……うう、お金がいくらあっても足りないよ」
「まぁ、一生それが再映されないわけではないと思うし、映画は長い目で見る趣味と捉えたら良いんじゃないか？」
「そうだね。映画産業が衰退しないことを祈るよ……」
「そ、それはフラグになるぞ……」
「おっと、いけない。えへへ。――でも、映画を撮りたい人はまだまだたくさんいるみたいだから、なくなることはないと願いたいなぁ」
「……結衣も、撮るんだろ？」
「んんっ。わ、わたしは、その、とりあえず撮って作品として残したいだけだから、ね？」
「まぁ、なんでもまずはやってみることではあるよな」

「……八幡も出演するんだよ？」
「……結衣が撮りたいなら、俺はそれを応援するだけだから、出てほしいなら出るさ」
「おお、八幡がすごい肯定してくれる……あ、いや、からかってるわけじゃなくてね、うれしいんだよ。――わたしの『やりたい』をちゃんと受容してくれて」
「……おう」
「照れてる、ふふ。――お、そろそろ時間だね、行こっか」
「この羞恥のままスクリーンに行くのか……」
「ご、ごめんって！からかうつもりじゃなかったからっ――」

＊　＊　＊

「……泣いた、ほんとに」
「うん……何度観ても良い映画だよ……八幡、なんだかきょうは素直？」
「まあ、そんな日もある」
「そっか。……もちろん、素直かそうじゃないとか関係なく、わたしは『八幡自体』をありのままに受け入れていることは覚えていてね」
「……結衣も今日はなんというか……アグレッシブだな」
「……急に恥ずかしくなってきたよ」
「あ、いや、からかっているわけではなくてだな……俺も、その、結衣のことを自然に

受け入れられてきていると思う。はじめて会った頃よりも、『結衣自体』を見られるようになったというか……俺は、『どんな結衣も受容する』とか、そういう言い方をするつもりはない。人間は流動的だから、『どんな』と表現することで、ある種結衣の性質を固定させたくない。人間は多面的どころか、その面と面の境界線もあやふやだと思うから。……変な表現になるが、曖昧な『結衣自体』を真正面から受け止めて認めたいと考えている。これも結衣の内面を固定させているかもしれないし、偉そうな言い草だが……」

「……ううん、ありがとう。とってもうれしいよ。それぞれ、『お互い自体』を愛しあえたらいいね……あっ」

「……」

「あ、愛すっていうのは、その、え、映画的な？意味でっ。ね？映画でいうラブみたいに、もっと広い概念で言ってるからねっ。あ、あれ？広いのかな？そ、その、あの……」

「お、おう。そうだな。……と、とりあえず、喫茶店で感想会でもし、しないか？」

「う、うん。……は、恥ずかしいぃ……――」

☒

「――コーヒーは頼んだし、席はここで良いか？」
「……うん」
「……まぁ、俺はなにも気にしてないし、もう照れなくても良いんじゃないか？」
「っ！ほ、掘り返さないでぇ……」
「わ、悪かったよ……」
「――よしっ。……もう大丈夫。もう平気です。モーマンタイ」
「なぜ広東語を……」
「えへへ、映画で覚えたのかな」
「やっぱり、結衣は映画への愛がすごいな」
「うん、それほど古い付き合いじゃないけどさ、いまでは『だいすきな人生のお伴』のような感じなんだよ……あっ……」
「……だいすきな、お伴……」
「……いっそのこところして」
「ま、まてっ結衣っ。早まるな！……あれ、このやりとり既視感があるような……？」

＊　＊　＊

「――落ち着いたか？」
「う、うん……ご、ごめんね、きょうの映画の話をしよっか」
「だ、大丈夫だ。了解……――映画、ざっくり言ってどうだった？」
「そうだね。映画という人生の一部である娯楽を通じて、少年と老人の『愛情』を――んんっ。……なんでもない、いちいちこの単語に反応するわけにはいかないから――その『愛』がいかにも映画らしいうつくしさで描かれていて良かったな」
「劇中で映画を主軸にする映画っておもしろいよな。当時、映画館に行くことがみんなの大きなたのしみ、人生の一部を占めるような娯楽であって、そのなかで、映写技師と映画ファンの少年がフィルムを媒介にして友情を超えた愛情を培っていくプロセスは観ていて感動するし、結衣の言うとおり、その愛がすごく『映画らしい』うつくしさだったな」
「ただ愛を描くだけじゃなくて、主人公の人生の過程で愛が薄れる場面もちゃんとあって、ラストにそれを再確認するのって、映画にありがちな展開だけど、やっぱり感動的だよ」
「まだ俺は人生を長く生きていないからわからんが、人間ってあの映画の主人公ように、いろんな人間関係を経験したり、紆余曲折があって成長していくものなんだろうか」

「うーん……どうだろ。――わたしは、映画は人生のすべてを説明してくれるわけじゃないと思ってる。そもそも人生の一〇〇パーセントを反映している映画って存在しないんじゃないかな。人間には様々な生き方があるからっていうのも理由の一つだけど、やっぱり映画では伝えきれないくらい実際の現実が複雑だからだと思う。でも、なにも現実をそのまま投影するのが映画の本質じゃないと思うし……ごめん、答えになってないけど」

「いや、ありがとう。しっくりきた。……たしかに現実をそのまま反映させているなら、映画は必要ないからな。ドキュメンタリーにしたって、かならず制作側の意図が反映されるし、それ自体が間違っているわけじゃない。現実の方が複雑って意味では、人生は映画のように生きられないけど、だからこそ、たのしいこと、かなしいこと含めて、もっともっといろんなことがこれから起こるんだろうな」

「『人生は映画のようにはいかない』って、映写技師のおじさんも劇中で語っていたよね。映画のなかですらそう言っているんだから、現実はもっともっと複雑だろうね。でも、八幡のことばどおり、だからこそ映画以上に喜怒哀楽たくさんなことを経験していくのかもね」

「でも、人生に苦難が起こりすぎるのも考えものだな」

「だね。『生きるのはつらいことだらけだ』ってことばはよく引用されるけど、いつか実

感させられる日が来るんだろうなぁ……」
「ま、無理して苦労する必要はいまはないと思う」
「うん。八幡とたのしくおしゃべりして人生を過ごしたい」
「……照れるな」
「あ、八幡照れてくれた。これでお互いの照れ度はおあいこだね」
「照れ度って何だ……でも、どう考えても結衣の方が照れていたような……？」
「あ、揚げ足取らないでっ……――」

⊠

「――そうそう。どのタイミングで言おうか迷ってたんだけどさ、この前八幡からもらったラノベ、読破してみたよ」
「ぜ、ぜんぶ読んでくれたのか？それはうれしいな」
「プレゼントしてくれる前に八幡が言ってた、毎日同じところで待っているとか、本の栞とかの意味がわかったよ、ふふ……それに、このラノベ自体すっごいおもしろかった。こんな壮大なストーリーがあるんだ！って」
「だよな。はちゃめちゃだけど繊細なヒロインが、実はＳＦ的な自然を超越した存在かもしれないって、これまでにない内容だったから、ラノベもアニメも興奮して観てたな……あっ、すまん、キモかったよな……」
「なんでさ、八幡。まったくそう思わないし、すきなことにワクワクしするのはなにも悪いことじゃないよ。わたしも映画のときは興奮して話しちゃうし……」
「世界が結衣ばっかりだったらいいのにな……」
「……え？」
「あっ、待ってくれ、少し語弊があった……その、俺の周りにはこういった話をすると

嫌な顔をして避けるやつが多いから、結衣みたいにやさしくて理解がある人間ばかりだったら生きやすいなぁと思ってな……」
「あ、ありがと……ちょっとびっくりしちゃった。八幡以外の人間全員がわたしだったらすごい世界だろうなって一瞬想像しちゃって」
「……それでも良いけどな」
「えっ!?」
「ちょ、ちょっと待ってくれっ！なんかよくわからないことを言った気がする……す、少しご失念してくれませんか……？」
「す、少し失念すればいいの……？」
「あっ、いやっ、ことばの綾というか……まぁ、うん、なんだ。みんな結衣だったら世のなかは丸く収まるってことだ。平和そのもの。モーマンタイ」
「は、八幡落ち着いて……少なくとも八幡はその世界にいてもらわないと……あっ、ちょっと待ってこれ語弊ある……あの……八幡も少しご失念してくださいませんか……？」
「……お、おう。少し、忘れようかいまの会話、お互いに……――」

＊　＊　＊

「――お互い落ち着いたね」

「そ、そうだな。なんか最近こんな雰囲気になってばっかりな気もするが……」
「そ、それは言わないっ！」
「あ、まあ、あれだ、ラノベの話に戻るが、続刊買って読み進めるのも良いし、アニメ版を観るのもたのしいと思うぞ」
「あっ、アニメの方も興味あるな……」
「すべて観ようと思ったら結構長いし、なんなら劇場版もあるからなぁ」
「えっ、映画もあるのっ！」
「お、おう……流石、映画には目がないな」
「い、いや、テレビアニメが嫌だってわけじゃなくてね、なんでだろうね、映画で観られるとわかった途端に興奮してしまう……」
「またテレビアニメとはつくりや表現が違うだろうからな。……でも、劇場版はテレビアニメ版をさきに観ないと内容は理解できないと思う。時系列からして」
「そっか。もちろん、アニメも観るよ。……そ、そのさ……テレビアニメの方を観てみるからさ、映画はいっしょに観てくれない……？」
「い、いいぞ。……それに、テレビアニメ版もいっしょに観るぞ、良ければだが」
「いいの？うれしい……！」
「あー……その、なんだ。そのときはだ……うち、来るか？」

「!!行くっっ!!!」
「め、めっちゃ食い気味ですね……」
「そ、そりゃ食い気味にもなりますよ……行きたい、八幡のおうち」
「まぁ、妹いるかもしれんが、それで良ければ……」
「小町ちゃんにも会いたいな。だって、わたしのことは小町ちゃん知ってるんでしょ?」
「結衣とデー……いっしょに出かけるときに、いろいろと小町に相談したからな」
「デー……」
「小町のことばがうつっただけだ。頼む、失念してくれ……」
「こ、これは『少し』じゃない失念のお願いだり、了解。……行っても良いなら、ぜひお邪魔したいな。八幡の家でアニメ観るってことだよね?」
「そう。小町がどう思うかわからんから、リビングのテレビを使わず、俺の部屋になるかもしれんが……あと、俺の両親がいない平日に来てもらうか……いや、でも結衣の帰りが遅くなるし、途中で親が帰宅する場合も……」
「け、結構難しそう?」
「いや、両親がネックでな、結衣に会わせるってのは、な……」
「わたしは問題ないけど……?」
「んんっ。……し、しかしだ、両親が、いままでともだちのいなかった俺が突然友人、し

かも異性といっしょいるのを目撃したら、いろいろ勘繰るに……――いや」
「？」
「――俺が間違ってたわ。両親に会ったら普通に紹介するよ、『親友』って」
「!!……えへへ、ありがとう」
「結衣に来てもらうってのに、こっちがあれこれ心配するのは馬鹿らしいし、なにより結衣に失礼だった。親にはどう邪推されてもいいか」
「邪推って、なにを……？」
「な、なんでもない……失念してくれ」
「き、きょうはどれだけ忘れたらいいのかな……？――」

☒

「――ここのコーヒーも凝ってるみたいでおいしいね」
「そうだな。……そいや、あれからもコーヒー道に精進してるのか？」
「うんっ。一時期はネルばっかりだったけど、いまはペーパーと交互にやって、どっちも練習してる感じかな」
「前に結衣に淹れてもらったネルドリップのコーヒー、すんごいまろやかでうまかった」
「えへへ、ありがとう。自分で淹れて飲むのも良いけど、誰かのためにつくってご馳走するっていうのが、コーヒーやっててうれしいことだね。特にネルドリップは手間ヒマかかるけど、その分愛情がこもって……的な……的なアレがアレなので、自分以外の人に振る舞うのがいちばんかな……うん」
「そ、そだな。アレがアレだからな」
「そ、そうなんです。アレなので」
「……」
「……」
「まぁ、親愛なる的な意味で、だもんな」

「!う、うん……そう……――やっぱり会うたびにこんな雰囲気になってしまう……」
「い、言わない約束だったろ、それは……」

＊　＊　＊

「――長らく置いていたけど、釣りも計画はほとんどできたわけだし、あとは日を決めて実行するだけだね」
「おう。……最初だから、結局手ぶらで行けるようなやさしい釣り堀に決めたけど、良かったか?」
「ぜんぜん大丈夫だよ。むしろ、二人とも初心者なんだからこれくらいじゃないと。最初、海上釣り堀おもしろそうってメールでやりとりしたけどさ、なかなか難易度が高いことがわかったからね……」
「だな……釣りについてまだなんにも知らないわけだし、まずはハードルは低めに、な。……それでもその釣り堀自体が県外で遠いし、丸一日外出するわけだから、一応お互いの両親には連絡しておくというわけなんだが……結衣はしてるもんな」
「うん。えっと、八幡は……?」
「いや、まだだ……――でも、今夜にでも親に会ったら伝えて許可もらうわ。いろいろと逡巡していたけど、いずれ結衣をうちに呼んで紹介するとも言ったしな」
「……照れるね」

「……まぁ、俺に親友がいると突然両親に告白したらびっくり仰天されるとは思うが……なんせともだちすら皆無の人間だったからな」
「その、八幡はもっとともだちをつくろうとは思わないの？その気があればいくらでもできると思うけど……」
「……どうだろな。――前よりかは捻くれ具合もやわらいで、自分の殻から少し出られるようになったが、これは結衣に出会ったおかげだ。いま、割と素直にいられるのは結衣の前だけだし、仮にこれからその素直さを誰に対しても出せるようになったところで、特に友人をたくさんつくりたいとも思わん。急に増えても困るしな。だから――いまは、ともだちは一人で良い」
「……そっか。でも、無理にこれからもわたしだけを友人にしなくて良いからね？」
「――俺は無理をしたくない怠惰な人間だから、『自然に』ともだちでいたいのが結衣なんだ。ともだちでいることに無理させないでくれ」
「……おお、かっこいいセリフ。映画俳優だね、八幡」
「ちょっ、きゅ、急に自分がキザで偉そうに思えて恥ずかしくなってきた……なんか既視感のあるやりとりだな……」
「ふふっ、ごめんごめん……――ありがとっ、八幡」
「……おう。それにしてもなんてナルシな言葉を吐いたんだ俺は。うぐぐ、黒歴史がま

た……」

☒

「――いろいろ話してきたけど、まだ音楽の話、そういえばしてなかったね」
「！ん……た、たしかにそうだったな」
「八幡がどんなの聴くのかすごい気になるな」
「お、俺はなぁ……いままではアニソンか最近の邦楽ばっかだったんだが……少し恥ずかしい話、洋楽も聴くようになった」
「おお！良い趣味だね、洋楽。すごいかっこいいと思うよ？恥ずかしくもないと思うけど」
「いや、いまのでもっと恥ずかしくなった……」
「？」
「……正直に言うと、結衣に『かっこいい趣味してるね』と言われたいがために、洋楽を聴きはじめたんだ……」
「そ、そうなんだ……」
「……でも、いまになってわかった。音楽の話題を振られた時点でこのことは言わなきゃいけなかったし、結果として全然かっこよく見えないな、これ……」

「で、でも、はじめた理由を言わなければ良かったんじゃ……？」
「それだと結衣を騙してるみたいで嫌だ。あぁ、なんてめんどうくさい人間なんだ俺は……」
「……ふふっ。――あっ、ごめんね、笑っちゃって。その、八幡がわたしに対してそう思ってくれてることがなんだかうれしくって」
「んんっ。まぁ、結衣が良い趣味いっぱい持ってるから、俺もなにか一つしゃれた趣味を披露して、結衣に『かっこいい！』と言われたいがために洋楽、それも古めのを聴き始めたんだが……」
「う、うん……」
「あっ待って引かないでください……――それでも、いざ聴いてみると結構ハマってな、いままで知らなかったのが損だったくらいたのしいんだ」
「へぇ、おもしろそうだね。古いというと、どれくらいの？」
「結衣の映画ほどではないが、７０、８０年代くらいだな。基本はロックだ」
「かっこいい！」
「待ってくれ恥ずかしい、すんげえ恥ずかしい……」
「ち、違う違う！からかってないよ！ほんとにかっこいいよ、洋ロックなんて」
「やさしさがこころに染みるぜ……」

「な、慰めてるつもりもないんだけど……わたしはほんとに門外だけど、どういうところがすきなの？」
「ヘタに言うとロックファンの人たちに怒られそうなんだが……別にいま怒るひとがいるわけじゃないし、良いか。――なんというか、洗練されすぎてないところかな」
「どういうこと？」
「それこそ当時は最先端の垢抜けた音楽だったと思うんだが、いま現在の視点で言えば、昔のロックは少し野暮ったい。音質って意味ではなくて、音自体が比較的シンプルだし、複雑すぎるわけじゃない。でも、逆に言えばメロディーがキャッチーなのが多くて、しかもシンプルな分インパクトが強い。野暮ったいってのは失礼だけど、でも明快で荒っぽいのが何とも言えず好きなんだ。怒るかもしれないけど、これって結衣の言うところのモノクロ映画にも言えるんじゃないか？」
「たしかに……現代から見たらもう『古っぽい』印象を受ける映画って、洗練されすぎていないから逆に新鮮だし、ストーリーもシンプルな分無駄がないから迫力もある」
「そうそう。多すぎる他要素でこちらを騙そうとしてこないから、より純粋に楽しめるというか……それに、曲が出てから年月も大分経過して、良くも悪くもいろんな批評を受けた後だから、いま話題のものよりも落ち着いて聴けるというか……うまく表現できんが」

「いや、わかるよ。『いま』のものじゃないから、現在進行形の批評に左右されないでありのままで作品に触れられるからね」
「そんな感じだ」
「それに、さっき八幡が言った『多すぎる他要素でこちらを騙そうとしてこない』って良い言葉だね。確かにその通りだ」
「よ、良かったか？」
「うん。……それって、八幡がわたしに対して『結衣を騙してるみたいで嫌だ』と言ったのと同じ意味合いなのかな？」
「ぶっ!!……ちょっ……」
「違うの？」
「いや……――ち、違くない。結衣に対しては俺のありのままで接したいと思ってるさ」
「……何回照れさすのさ」
「結衣から言ったんだろが……」
「ごめんごめん。……ありがとね。――そうだ。わたしもそういった音楽聴きたいし、なにかおすすめのアーティスト、いる？」
「ん？まぁ、いろいろいるが、例えば――」

⊠

「――いやぁ、ひさしぶりに八幡が熱弁してる姿を見たかもしれない。ふふっ」
「恥ずかしい……」
「マックスコーヒーをアピールする八幡を思い出したよ」
「更に恥ずかしい……」
「ミラノ風ドリアを力説する八幡と重なって見えたよ」
「なおのこと恥ずかしい……ってなにかお互いこの会話たのしんでないか」
「わたしはいつでも八幡との会話をたのしんでるよ」
「俺もだけどさ」
「んんっ！……そこは『かてて加えて恥ずかしい……』と言うところだよ」
「難しいことば知ってるなぁ……結衣はえらい」
「恥ずかしい……」
「つーかその歳でおいしいコーヒーを淹れられて映画も詳しいとか才女なのか？」
「層一層恥ずかしい……」
「その上勤勉で知識も豊富ときた。才色兼備の権化なのか？」

「なおなお恥ずか……え？」
「ん？」
「……」
「……あっ……」
「……」
「……嘘は言ってない」
「……八幡顔真っ赤」
「結衣もな……」
「……こ、ここ暑いしそろそろ外出よっか」
「おう……」

＊　＊　＊

「朝に映画観たからまだまだ外は明るいね」
「そうだな、むしろ店内の方が涼しかったかもしれん」
「でもさっきそこを暑くさせたのは誰だったかな……？」
「なんのことだろうか、さっぱりわからん……――さ、さて、この後どうする？」
「とぼけ方がうまくなったね八幡……んー、そこまで考えてなかったや、ごめんね」
「腹は減ってるか？」

「いや、そんなにかな。朝いっぱい食べたし。八幡は？」
「俺もそこまでは。……じゃあ、そのだな……――服、買いに行くの付き合ってくれないか？」
「え？」
「そんなに意外だったか……小町にいろいろコーディネートやなんやらを教えてもらっているんだが、どうにもまず服が足りなくてな……一着なら買えそうだから、トップスだけでも結衣に見繕ってもらえないかと思って」
「わ、わたしでいいの？それこそ小町ちゃんに見てもらった方が……」
「それも手だが、そもそも結衣と遊ぶためのコーディネートなんだから、結衣に服を選んでもらうのが順当だと思ってな」
「……へへっ、こそばゆいですな」
「……そこはまた『恥ずかしい……』で始まるループでは？」
「は、八幡っ！」
「す、すまん！ちょい魔が差してからかってしまった！」
「もう……ちょっと怒ってしまったので、罰として八幡にもわたしの服を見繕ってもらおうかな」
「え？」

「わたしと同じ反応とは……わたしも八幡と遊ぶためにコーディネートしたいから、一着選んでほしいな。……ダメ？」
「ダ、ダメではないんだが……俺、センスないぞ？」
「センスは関係ないよ。だって八幡といるための服だから、八幡が良いと思うものがわたしたちの『正解』でしょ？」
「……わかった。自信はないけど頑張るわ。……しかしなぁ」
「？」
「ぜんぜん罰ではないんだが、これ……むしろ結衣の服を選べるとかめちゃくちゃうれしいけど……」
「……」
「結衣？」
「……は」
「は？」
「恥ずかしいぃ……」
「えっ！……結局このループに陥る運命だったのか……？ゆ、結衣が本気で照れるタイミングがわからない……――」

☒

「――なぁ、ここって……」
「ん？どうしたのかな？」
「――古着屋街、ですよね」
「ですね」
「……」
「……」
「結衣。きょうはありがとう。たのしかった」
「いや、せっかく来たんだからお店入ろうよっ。それに決め顔は最後に取っておいてよ」
「お家帰る!!」
「駄々もこねないの!!」
「……」
「……」
「……古着屋入るほうがまだ恥ずかしくないかもしれない」
「すごい見られた……八幡のせいだからね……」

＊　＊　＊

「結衣が案内してくれると聞いたからには、かなりオシャレな服屋を覚悟していたが、まさか古着屋とは……ハードル高ぇ……――あっ、結衣が連れて来てくれたのにごめん」
「ふふっ、八幡誠実だね。大丈夫だよ。――それにね……わ、わたしも緊張しています……」
「えっ!?」
「だっ、だって！古着屋だよ!?なんか街を歩いてるひとたち、みんなしゃれてるし！全員モデルか芸術家なの!?」
「お、落ち着け結衣っ、見られてるぞ……」
「ご、ごめん。つい……」
「その、じゃあどうして古着屋にしたんだ？」
「……前々から興味はあったんだけど、中学生だしともだちとだって気軽に行けないから、もしいっしょにお出かけするなら年上で気心が知れた八幡とがいいなって……」
「んんっ。ん、そうか。まあ、結衣が行きたいところに着いていくのが俺の役目だからな」
「……ありがと」

「よしっ。とりあえず……――どこ入る？」
「き、緊張してきた……いま、あたまのなかでターミネーターのテーマ曲が流れてる……」
「俺はバックトゥーザフューチャーだ……」
「実は八幡たのしみにしてる……？」

＊　＊　＊

「さて、いろいろ店前を偵察した結果、『初心者でもさりげなく入店できるくらいある程度のお客さんがいて、キョロキョロしていても店員さんにぐいぐいされなさそうな』古着屋に来たけれど」
「改めてことばにするとちょっと悲しいね」
「それは言わない約束だ、結衣……よし、古着はさっぱりわからん。結衣、あとは任せた」
「えっ!?ち、ちょっと待ってよ。いっしょに選ぼうよ！」
「し、しかしただでさえ服はわからないのに、『古着』なんて未知の世界だから……」
「それはわたしもだよ。でも、古着も別段ハイランクのファッションってわけでもないんじゃない？さっき取り乱しておいてなんだけど……」
「たしかにそうかもしれん……古着は古着。実質服と変わらん」

「そうそう。『実質』って付け加えなくてもそりゃ服だけどね」
「目を凝らせ……こころの声を聴け……」
「ああ……八幡が支離滅裂なこと言い出した……古着に恨みでもあるの……？」
「もう大丈夫だ。俺はおしゃれ人間になる」
「うん。大丈夫じゃなさそうだね」
「辛辣だ……ただな、結衣」
「ん？」
「――古着はどう着れば『おしゃれ』になるのかわからない」
「それは同意します……あれ、なぜかわたしまでよくわからなくなってきた……よしっ。大丈夫、わたしたちなら大丈夫……所詮は服なんだから……――八幡、いっしょにがんばろう。おしゃれ人間になろう」
「さ、さっきの俺の発言に感化されてないか？ほんとに大丈夫なのか？」
「行くよ」
「へ？もう店内だぞ？ちょっ、ゆ、結衣！て、手が……！――」

☒

「……いろんな服があるな」
「……そうだね」
「ダメだ。普段服に関心がないからか、『いろんな服』みたいな貧相なボキャブラリーしか思いつかん」
「わたしも似たようなものだよ……」
「でもなんというか、ほんとにバリエーションがあって、眺めていてたのしくはあるな」
「たしかに！似合うかどうかは置いといて、普通の服屋にはない種類の衣服がたくさん並んでる光景はワクワクするね」
「そうだな……そ、それでな、結衣」
「ん？」
「て、手が……」
「？……あっ」
「……」
「……」

「もしかしたら、俺たち、こういったこと慣れてきたのかもな……」
「そ、そうかも……やっぱり照れるけど」
「まあ、おかげで、いまも緊張せず店内を歩けているよ」
「じゃ、ずっと手をつないでおく？」
「うっ……」
「ふふふ。じょーだんだよ」

＊　＊　＊

「……あ」
「どした？」
「見てこれ……この、襟付きのシャツ」
「ん？……おお、なんか、オシャレだな」
「だよねだよね……これはカモかな？鳥の刺繍がしてあって、すごいかわいい」
「こういうの、何シャツって言うんだろうな」
「ちょっと訊いてみようかな」
「おお……古着屋最難関の『店員に尋ねる』をするのか……」
「だ、だって、八幡に似合うと思ったし……」
「……その、俺もこれ、結衣に似合うと思ってるんだよな。なんというか、ユニセックス

的で」
「！ほんと？うれしいな……なので、訊いてきます。もちろん、八幡、隣にいてね」
「お、おう……」
＊　＊　＊
「チロリアンシャツって言うんだね」
「いろんな種類があるんだな。鳥だけじゃなくて、花が刺繍されてたり」
「ね、ねえ……これ、おそろいで着ない？」
「……俺も、恥ずかしいけど、それ言おうと思ってた」
「えへへ……うれしい。お互いに似合いそうなの選ぼうよ」
「だな。……こころなしか、さっき尋ねた店員さんが、向こうからやさしい眼差しでこっちを見ている気が……」
「……そしてさ、このまま買ったシャツを着て、外に出ない？」
「!?!?」
「フィッティングルームもあるわけだし……ね？」
「きょ、きょうはぐいぐい来るな結衣……」
「ダメだった？」
「……そのききかたはズルいぞ」

「えへへ」

＊　＊　＊

「ペアルックになったね！」

「店員さんにっこにこだったな……」

「八幡、すごい似合ってるよ」

「結衣も、その花の刺繍が、その……チャーミングで、似合ってて、か、かわいいと思う」

「……八幡もぐいぐい来てるね？」

「お、俺はちゃんと思ったことをだな……」

「わかってるよ……いまのは、照れ隠しっ。それじゃ、残りの時間もたのしもう！」

「……顔、真っ赤だぞ」

「八幡、それは言わない約束……――」